# 皇室法規類聚

和装本
ワ 6
6288

1658

ワ 6
6288

宮内省圖書寮

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ樞密院官制及事務規程中ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十三年十月七日　内閣總理大臣伯爵山縣有朋

勅令第二百十六號（官報十月八日）

明治二十一年勅令第二十二號樞密院官制第二條第六條同事務規程第十條第二項ヲ改正スルコト左ノ如シ

樞密院官制

第二條　樞密院ハ議長一人副議長一人顧問官二十五人書記官長一人書記官五人ヲ以テ組織ス

第六條　樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ

宮内省

去水五味治平藏

開キ意見ヲ上奏ス

一 皇室典範ニ於テ其權限ニ屬セシメタル事項

二 憲法ノ條項又ハ憲法ニ附屬スル法律勅令ニ關スル草案及疑義

三 憲法第十四條戒嚴ノ宣告同第八條及第七十條ノ勅令及其他罰則ノ規定アル勅令

四 列國交渉ノ條約及約束

五 樞密院ノ官制及事務規程ノ改正ニ關スル事項

六 前諸項ニ掲クルモノヽ外臨時ニ諮詢セラレタル事項

樞密院事務規程

第十條第二項

議長ハ書記官長ヲシテ其事件ヲ辨明セシメ次テ各員ヲシテ自由ニ討論セシム何人タリト雖モ議長ノ許可ヲ



受クルニ非レハ發言スルコトヲ得ス議長ノ討論ニ參與スルハ其自由ニ屬スルモノトス討論既ニ盡ルノ後ハ議長ヨリ問題ヲ定メ表決ヲ爲サシム

○二十八年九月二十日

## 叙功者犯罪取扱方

司法大臣ヘ通牒

叙功者犯罪取扱方ニ付左ノ通訓令セラルヘシ

明治二十八年九月二十日　内閣総理大臣

叙功者犯罪取扱方ハ勲六等以上ノ者ト同一ニスヘシ

賞勲局稟申

帯勲者犯罪ノ節取扱方ハ明治十五年三月二十二日司法省ヘ達相成又明治十六年五月八日司法卿ノ伺ニ對シ指令ノ趣モ有之候処十五年三月二十二日ノ達ニハ帯勲者ト有之ニ付何種ノ勲章ニ拘ハラス包含致居候得共十六年五月八日ノ指令ニハ勲六等以上云云トア

リテ功級ノ制未タ相立タサル時ニ付功級ノ事無之ハ勿論ナリ依テ此際叙功者犯罪ノ節取扱方ニ付別紙ノ通司法大臣ヘ通牒相成度尤モ叙功者ハ特別ノ取扱ヲ要シ候條総テ勲六等以上ノ者ト同一ニ取扱候様致度此段上申ス　廿八年九月十六日

參照

丙第十一號（三月廿七日）

大審院
警視廳
府縣
東京府ヲ除ク
裁判所

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

（別紙）

司法省

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勲有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ罹ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルヿヲ得此旨相達候事

明治十五年三月廿二日

太政大臣三條實美

丙第二號（五月十四日）

大審院　裁判所
警視廳　府縣
東京府ヲ除ク

勅奏官華族並ニ有位帶勲者犯罪取扱方ノ儀ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺候処朱書ノ通御指令相成候條為心得此旨相達候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省丙第十一號達ト可相心得事

〔別紙〕

勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀伺

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勲有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪者取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月廿二日付ヲ以テ御達有之候処其罰金ニ處スヘキモノト雖モ或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ処シ及ヒ罰金科料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ軽禁錮又ハ拘留ニ処スギ儀モ有之候條右本人ヲ出廷セシムル場合及換刑シテ軽禁錮又ハ拘留ノ刑ニ処スヘキ時ハ矢張其時々奏聞可致儀ト相心得可然哉此段相伺候也

明治十六年三月三十一日

司法卿大木喬任



太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ通

但十五年三月二十二日附其省ヘ達中帶勲有位者トアルハ勲六等以上従六位以上ヲ指シタル儀ト可相心得事

明治十六年五月八日

法制局書記官ヘ照會

別紙局甲四九号ハ本月二日御上申相成候処更ニ改案相成候ニ付及御(四)付候條可成早ク御上申有之度候也

九月十六日

内閣書記官

法制局書記官御中

追テ最前ノ御局議案併テ及御返却候也

法制局議案

別紙賞勲局總裁上申叙功者犯罪取扱方司法大臣ヘ通牒ノ件ヲ審査スルニ従来勲六等以上ノ者ノ犯罪ハ現行犯ヲ除ク外奏聞ヲ経テ処分スヘキ成規ナルニ依リ金鵄勲章ヲ賜リタル者ノ犯罪ニ付テモ権衡上特別ノ取扱ヲ為スヲ要ス而シテ金鵄勲章ハ武功抜群ナル者ニ賜ハルモノニシテ殊ニ榮譽ノ勲章ナレハ叙功者ノ犯罪取扱方ハ凡テ勲六等以上ノ者ノ犯罪取扱方ト同一ニスルヲ至當トス仍テ上申ノ通閣議決定ノ上司法大臣ヘ通牒相成可然ト認ム廿八年九月十七日



通牒案

呈案ノ通

附箋

御沙汰ニ依リ本年九月二日上申閣議案ノ改案

聞

内閣上奏

叙功者犯罪取扱方ノ件

右謹テ奏ス

明治二十八年九月二十日

内閣總理大臣侯爵伊藤博文

○廿七年六月四日

華族令中追加

宮内省照會 甲二

宮内省内事課 丙第八七九號

明治十七年七月七日宮内省達華族令中別案ノ通追加イタシ度戸籍法等ニ關係モ可有之ニ付御意見承知致度此段及御照會候也

明治二十六年十一月廿二日

宮内大臣子爵土方久元

内閣總理大臣伯爵伊藤博文殿

宮内省甲第　號

華族

宮内省

明治十七年七月七日達華族令左ノ通追加ス

明治　年　月　日

奉勅　　宮内大臣

第十一條　華族ノ戸主ニシテ左ノ項ノ一ニ觸ルヽトキハ族籍ヲ除キ其爵位ヲ褫奪ス（左ノ項ニ掲ル事項ノ一ニ當ルモノハ華族ノ稱ヲ除キ族籍ヲ削リ）第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニ係ルトキハ其禮遇ヲ禁止シ位ヲ有スル者ハ之ヲ奪ヒ嫡長子孫ニ在リテハ將來華族ノ榮典ヲ享クルコトヲ得ス

一　輕懲役若クハ輕禁獄以上ノ刑ニ處セラレタルモノ

二　監視ニ付セラルヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ刑法第三百五十三條第三百六十四條ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレタルモノ

三　家資分散ノ宣告ヲ受ケタルモノ（若クハ破産一箇年以内ニ復權セサルモノ）

四　華族タルノ体面ヲ汚辱スル失行ノ甚シキモノ

第十二條　第五條及第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ前條第一乃至第四ノ一ニ當ルトキハ其禮遇ヲ禁止シ位記アルモノハ之ヲ返上セシム

華族ノ嫡長子孫ニシテ前條第一乃至第四ノ一ニ當ルトキハ華族ノ榮典ヲ継承スルコトヲ得ス

第十三條　華族ノ戸主及第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ左ノ項ノ一ニ觸ルヽトキハ其ノ禮遇ヲ停止ス（左ノ項ニ掲ル事項ノ一ニ當ルトキ）

一　禁錮ノ刑ニ處セラレタルモノ

二　刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋若クハ責付中ノモノ

ノ又ハ監視中ノモノ

三 宮内省ノ達又ハ命令ニ遵ハサルモノ（家資分散若クハ破産ノ宣告ヲ受ケタル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケタルモノ）

四 華族タルノ躰面ヲ汚辱スル失行アリタルモノ

第十三條（第十二條）第十一條第十二條ハ處分ハ勅裁ヲ仰キ宮内大臣之ヲ行フ但シ第十一條第四第十二條第三第四ニ該ルモノハ勅裁ヲ仰クノ前委員ヲ選命シ其ノ詳議ニ付ス（華族タルノ躰面ヲ汚辱スル失行ノ甚シキモノ又ハ失行アリタルモノニ對スル處分ニ付テハ）

附則

第十四條（五）（第十一條第三ノ期限ハ本令施行前家資分散又ハ破産ノ宣告ヲ受ケタルモノニ對シテハ本令施行ノ日ヨリ起算ス）本令發布以前身代限ノ處分又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルモノニシテ本令發布ノ日ヨリ滿一年間ニ債務ノ弁償ヲ終ヘス又ハ復權ヲ得サルモノハ第十一條ニ據リ處分ス（本令施行前身代限ノ処分ヲ受ケタルモノニシテ本令施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ債務ノ辨償ヲ終ヘサル



トキハ第十一條ヲ適用ス

法制局書記官ヘ照會

別紙ノ通宮内大臣ヨリ照會有之候間至急御調査有之度候也

一月三十一日

内閣書記官

法制局書記官

御中

宮内省ヘ回答

客年十一月二十二日宮内省内事課丙第八七九號ヲ以テ華族令中追加案ノ件ニ付意見御承知相成度旨御照

會ノ趣了承右ハ別ニ異見無之候但附箋ノ通修正相成
候方可然ト存候此段及回答候也

明治廿七年三月十五日　内閣總理大臣伯爵伊藤博文

法制局議案　廿六　宮甲二

別紙宮内大臣照會明治十七年七月七日宮内省達華族
令中追加案ノ件ヲ審査スルニ右ハ左案ノ通回答相成
可然ト認ムニ十七年三月十二日

尤モ貴族院令第八條ニ「貴族院ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ
華族ノ特權ニ關ル條規ヲ議決ス」トアルニ依リ本件
ハ同院ノ議ニ附セラルヘキモノナルヤ否疑ハシト
雖モ右華族ノ特權トハ頗ル漠然ニシテ其ノ定議ヲ
與フルコト容易ナラスト雖首トシテ其ノ公法上有
スル特殊ノ權利ヲ指スナルヘク爵稱ノ與奪及禮遇



ニ関スル事ノ如キハ必シモ本條ニ包含ストモ断ス
ヘカラス且　天皇ノ諮詢ニ應ヘトアルヲ以テ之ヲ
御下問被為在トキハ貴族院ニ於テ之ヲ議セサルヲ
得サルノ義務アルヲ示シタル條項ニシテ決シテ華
族ノ特權ニ関シ該院ニ與フルニ自ラ進ンテ之ニ容
喙スルノ權利ヲ以テシタルモノトナス可ラス

参照

華族令　明治十七年七月　宮内省達華族一般

第四條　嗣今有爵者又ハ戸主死亡ノ後男子ノ相續ス
ヘキ者ナキトキハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ

第五條　有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及名稱ヲ享
ク

第六條　華族戸主ノ戸籍ニ屬スル祖父母、父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク

○

刑法

第七條　左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト為ス

一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　無期流刑
五　有期流刑
六　重懲役
七　軽懲役
八　重禁獄
九　軽禁獄

第八條　左ニ記載シタル者ヲ以テ軽罪ノ主刑ト為ス

一　重禁錮
二　軽禁錮
（略）

第九條　左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト為ス

一　拘留
（略）

第十條　左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト為ス

（略）
四　監視
（略）

第三百五十三條　有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ效ナシ

第三百六十四條　子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

○

家資分散法（明治二十三年八月法律第六十九號）

第一條　民事訴訟法ノ強制執行ノ處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債權者ニ對シテハ管轄裁判所ハ



職權ニ因リ又ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ為スヘシ

（略）

○

刑事訴訟法

第百五十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭スヘキ證書ヲ差出シ且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得

（略）

第百五十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ為スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシムヘキ證書ヲ差出サシムヘシ

○

貴族院令（明治二十二年二月勅令第十一号）

第八條　貴族院ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ華族ノ特權ニ關スル條規ヲ議決ス

○

叙位條例（明治二十年五月勅令第十号）

第四條　凡ソ位ハ懲戒ニ因リ返上セシムルカ又ハ刑法ニ因リ公權ヲ剝奪セラルヽノ外終身之ヲ有スルヲ得



宮内省照會（甲五）

宮内省内事課丙第五二七號

華族令追加之件貴族院令第八條ニ依リ同院ヘ御諮詢被為在候條提出方可然御取計相成度別紙追加案相添此段申進候也

明治二十七年五月十六日

宮内大臣子爵土方久元

内閣總理大臣伯爵伊藤博文殿

宮内省達甲第　號

華族

明治十七年七月七日達華族令左ノ通追加ス

明治　年　月　日

奉勅

## 宮内大臣

第十一條　華族ハ相續及家政上ノ關係ヲ定ムル爲ニ法律命令及華族ニ關スル規定ノ範圍内ニ於テ家範ヲ定ムルコトヲ得

第十二條　家範ハ宮内大臣ノ認許ヲ經ヘシ其條項ヲ改正增補スルトキ亦同シ

第十三條　華族ノ戸主ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ華族ノ稱ヲ除キ其爵位ヲ返上セシム

一　輕懲役若クハ輕禁獄以上ノ刑ニ處セラレタル者

二　監視ニ付セラルヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ刑法第三百五十三條第三百六十四條ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者

第十四條　第五條及第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ



前條事項ノ一ニ當ルトキハ其ノ禮遇ヲ禁止シ位記アル者ハ之ヲ返上セシム

華族ノ嫡長子孫ニシテ前條事項ノ一ニ當ルトキハ華族ノ榮典ヲ繼承スルコトヲ得ス

第十五條　華族ノ戸主及第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其ノ禮遇ヲ停止ス

一　禁錮ノ刑ニ處セラレ其ノ刑期間ノ者

二　刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋若クハ責付中ノ者

又ハ監視中ノ者

三　家資分散若クハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

四　第十條ノ義務ヲ充タササル者

五華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者

第十六條　華族タルノ體面ヲ汚辱スル失行アル者ハ第十三條又ハ第十五條ニ依リ処分ス

第十七條　華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者ハ榮典ヲ辞スルコトヲ得

第十八條　第十三條乃至第十七條ノ処分ハ勅裁ヲ仰キ宮内大臣之ヲ行フ但第十五條第四第五第十六條及第十七條ノ処分ニ付テハ七名以上ノ委員ヲシテ評議セシメ勅裁ヲ仰クヘシ

内閣上奏

可

華族令中追加

御諮詢案貴族院ヘ提出ノ件

右恭シク

聖裁ヲ仰ク

明治二十七年五月十八日

内閣書記官議案　宮甲五

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

華族令中追加ノ件ニ関シ宮内大臣ヨリ照會有之タルニ付テハ左案ノ通貴族院ヘ提出相成可然哉　二十七年五月十七日

華族令中追加ニ関シ貴族院令第八條ニ依リ御諮詢ノ件

右

勅旨ヲ奉シ貴族院ニ提出ス

明治廿七年五月十九日

總理大臣

爵位局主事照會

貴族院ヘ御諮詢相成ヘキ華族令追加案
御裁可相成候ハヽ貴族院ヘ提出セラルヽ前岩倉爵位
局長ヘ御内報有之度事

本件伊東書記官長ト岩倉爵位局長ト打合濟

右御承知置ヲ乞フ

五月十九日　　爵位局主事

内閣書記官

御　中

貴族院ヘ通牒

華族令中追加御諮詢ノ件ハ秘密會議ヲ以テ議定相成



度此段及要求候也

明治廿七年五月十九日　　内閣總理大臣

貴族院議長宛

貴族院上奏

貴族院ハ御諮詢ノ命ヲ恪ミ華族令中追加ニ関スル
件ニ對シ謹ミテ院議ヲ盡シ茲ニ其ノ議決スル所ヲ具
シ恭シク
聖明ノ採擇ヲ仰ク

明治二十七年五月三十一日

貴族院議長侯爵蜂須賀茂韶

宮内省達甲第　號

明治十七年七月七日達華族令左ノ通追加ス

明治　年　月　日

奉勅

宮内大臣

第十一條　華族ハ相續及家政上ノ関係ヲ定ムル為ニ法律命令及華族ニ関スル規定ノ範囲内ニ於テ家範ヲ定ムルコトヲ得

第十二條　家範ハ宮内大臣ノ認許ヲ経ヘシ其ノ條項ヲ改正増補スルトキ亦同シ

第十三條　華族ノ戸主ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ監視ニ付セラルヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ華族ノ稱ヲ除キ其ノ爵位ヲ返上セシム

一軽懲役若クハ軽禁獄以上ノ刑ニ處セラレタル者

二監視ニ付セラルヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ刑法第三百五十三條第三百六十四條ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者

第十四條　第五條及第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ前條事項ノ一ニ當ルトキハ其ノ禮遇ヲ禁止シ位記アル者ハ之ヲ返上セシム

華族ノ嫡長子孫ニシテ前條事項ノ一ニ當ルトキハ華族ノ榮典ヲ継承スルコトヲ得ス

第十五條　華族ノ戸主及第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其ノ禮遇ヲ停止ス

一禁錮ノ刑ニ処セラレ其ノ刑期間ノ者

二刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋若クハ責付中ノ者
又ハ監視中ノ者
三家資分散若クハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者
又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル
者
四第十條ノ義務ヲ充タサヽル者
五華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者
第十六條　華族タルノ體面ヲ汚辱スル失行アル者ハ
第十三條第十四條又ハ第十五條ニ依リ處分ス
第十七條　華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者ハ栄典ヲ辞
スルコトヲ得
第十八條　第十三條乃至第十七條ノ處分ハ勅裁ヲ仰
キ宮内大臣之ヲ行フ但第十五條第四第五第十六條



及第十七條ノ處分ニ付テハ華族中ヨリ勅選セラレ
タル七名以上ノ委員ヲシテ評議セシメ勅裁ヲ仰ク
ヘシ

貴族院稟申

華族令追加ニ関シ貴族院令第八條ニ依リ
御諮詢ノ件

右本院ニ於テ議決セリ依テ御執奏相成度此段申進候
也

明治二十七年五月三十一日

貴族院議長侯爵蜂須賀茂韶

内閣總理大臣伯爵伊藤博文殿

宮内省ヘ通牒

別紙貴族院議長上奏華族令中追加ニ関スル御諮詢ノ件決議書ハ

御覧相濟候ニ付及御送付候也

明治二十七年六月四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

（貴族院上奏ノ本書ヲ添フ）

内閣書記官案 宮甲五

明治廿七年五月三十一日　内閣書記官 花房 柴田

内閣總理大臣 伊藤

内閣書記官長 伊東

| | |
|---|---|
| 外務大臣 陸奥 | 大蔵大臣 渡辺 |
| 内務大臣 芳川 | 陸軍大臣 大山 |
| 海軍大臣 西郷 | 司法大臣 芳川 |
| 文部大臣 井上 | 農商務大臣 榎本 |
| 遞信大臣 黒田 | |

（二大）

貴族院議長上奏華族令中追加ニ関スル御諮詢ノ件決議書

右回覧ニ供ス

閣

貴族院議長上奏華族令中追加ニ関スル御諮詢ノ件決議書

右謹テ奏ス

明治二十七年六月二日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

○二十七年六月三十日

華族令中追加

宮内省達

宮内省達甲第二號　華族

明治十七年七月七日達華族令左ノ通追加ス

明治二十七年六月三十日

奉勅　宮内大臣子爵土方久元

第十一條　華族ハ相續及家政上ノ關係ヲ定ムル為ニ法律命令及華族ニ關スル規定ノ範圍内ニ於テ家範ヲ定ムルコトヲ得

第十二條　家範ハ宮内大臣ノ認許ヲ経ヘシ其條項ヲ改正増補スルトキ亦同シ

第十三條　華族ノ戸主ニシテ監視ニ付セラルヘキ禁

錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ華族ノ稱ヲ除キ其爵位ヲ返上セシム

第十四條　第五條及第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ前條ニ當ルトキハ其禮遇ヲ禁止シ位記アル者ハ之ヲ返上セシム

華族ノ嫡長子孫ニシテ前條ニ當ルトキハ華族ノ榮典ヲ繼承スルコトヲ得ス

第十五條　華族ノ戸主及第五條第六條ノ禮遇ヲ享クル者ニシテ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其禮遇ヲ停止ス

一　禁錮ノ刑ニ処セラレ其刑期間ノ者

二　刑事ノ訴ヲ受ケ勾留又ハ保釋若クハ責付中ノ者又ハ監視中ノ者

三　家資分散若クハ破産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

四　第十條ノ義務ヲ充タサヽル者（華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者）

第十六條　華族タルノ體面ヲ汚辱スル失行アル者ハ

第十三條　第十四條又ハ第十五條ニ依リ處分ス

第十七條　華族ノ品位ヲ保ツ能ハサル者ハ榮典ヲ辭スルコトヲ得

第十八條　第十三條乃至第十七條ノ處分ハ勅裁ヲ仰キ宮内大臣之ヲ行フ但第十五條第四第五第十六條及第十七條ノ處分ニ付テハ華族中ヨリ勅選セラレタル七名以上ノ委員ヲシテ評議セシメ勅裁ヲ仰クヘシ

〔參照〕

宮内省達華族令（明治十七年七月七日）抄録

第五條　有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及名稱ヲ享ク

第六條　華族戸主ノ戸籍ニ屬スル祖父母、父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク



○廿一年十月廿七日

皇居御造營落成ニ付自今宮城ト稱セラル

宮内省告示

第六号

皇居御造營落成ニ付自今宮城ト稱セラル　二十一年十月二十七日

皇后陛下御親授賞勲ニ付自今宮廷ヲ御ト為サル
宮内書記官
皇后陛下御親授賞勲ニ付自今宮廷ヲ御ト為サル
○廿一年十月廿九日



○廿一年十月三十一日
皇太后宮ヘ勲一等寶冠章ヲ贈進セラレ且各親王御息所
同章叙賜皇后陛下御親授在ラセラル

賞勲局稟申

今般皇太后宮ヘ勲一等寶冠章御贈進被仰出且別記各
親王御息所ヘモ同章御叙賜被仰出明十一月一日
皇后陛下御親授被為在候條此段上申ス 廿一年十月三十一日

一品大勲位熾仁親王妃　董子
二品大勲位彰仁親王妃　賴子
二品大勲位貞愛親王妃　利子女王
二品大勲位能久親王妃　富子
三品大勲位威仁親王妃　慰子



宮内省

三品大勲位賜二親王　妃董子
二品大勲位賜父親王　妃富子
二品大勲位貞愛親王　妃利子女王
二品大勲位彰仁親王　妃賴子
一品大勲位燾仁親王　妃董子

皇太子宮ノ勲一等寶冠章ヲ同章ノ勲一等寶冠章ニ改メラレ

令親王妃宮ノ勲一等寶冠章ヲ賜フ

賞勲局彙報

同章授賜皇太子宮ノ勲一等寶冠章ヲ授賜ス

皇太子宮ノ勲一等寶冠章ヲ授賜フ

○廿一年十月三十一日



○廿一年十一月一日

始メテ各親王妃ヲ勲位ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

官報抄錄

敍勲一等賜寶冠章　一品大勲位熾仁親王妃董子
敍勲一等賜寶冠章　二品大勲位彰仁親王妃賴子
敍勲一等賜寶冠章　二品大勲位貞愛親王妃利子女王
敍勲一等賜寶冠章　二品大勲位能久親王妃富子
敍勲一等賜寶冠章　三品大勲位威仁親王妃慰子

○廿一年十一月二日

皇太后宮ヘ一等寶冠章ヲ贈進セラル

官報抄錄

昨一日午前十時德大寺侍從長ヲ御使トシテ皇太后宮ヘ勲一等寶冠章ヲ御贈進遊ハサレタリ　二十一年十一月二日

八鍾一等寶授章ヲ贈與ス

明治十年十一月二日

宮内卿侯爵

皇太后宮ハ一等寶授章ヲ贈與ス

○廿一年十一月二日

○廿二年二月十一日

皇族列次ヲ定ム

宮内省達 宮内大臣奉勅

第二号

皇族列次ハ實系ノ遠近ニ從ヒ皇位継承ノ順序ニ依ル但シ親王級品宣下アリシ者ニ限リ特殊ノ席次ヲ以テシ一般ノ列次左ノ通定ム

熾仁親王

晃親王

彰仁親王

貞愛親王

朝彦親王

能久親王

威仁親王

載仁親王
依仁親王
載仁王
邦芳王
博恭王
菊麿王
成久王
恒久王
輝久王
邦憲王
邦彦王
守正王
多嘉王





○廿二年十鳩月彦日王
立太子ノ詔稔彦王

脱祖宗ノ遺範ニ循ヒ嘉仁親王ヲ立テ以テ皇太子ト為ス
茲ニ之ヲ公布シテ周ク知悉セシム
明治二十二年十一月三日　宮内大臣子爵土方久元奉

○廿二年十一月三日

立太子ノ詔

朕祖宗ノ遺範ニ循ヒ嘉仁親王ヲ立テ、皇太子ト為ス

茲ニ之ヲ公布シテ周ク知悉セシム

明治二十二年十一月三日　宮内大臣子爵土方久元奉

○二十一年五月十八日

各親王ハ樞密院會議ニ班列ノ權ヲ有セシメラレ内大臣公爵三條實美ヘ特ニ命シテ同會議ニ班列セシメラル

勅書

各親王

朕丁年以上各親王ノ朕カ重要ノ國務ニ參スルヲ欲シ命シテ樞密院會議ニ班列スルノ權ヲ有セシム

御名　御璽

明治二十一年五月十八日

内閣總理大臣從二位勲一等伯爵黑田清隆

内大臣從一位大勲位公爵三條實美

朕卿カ重要ノ國務ニ參スルヲ欲シ特ニ命シテ樞密院

會議ニ班列セシム

御名御璽

明治二十一年五月十八日

内閣總理大臣從二位勲一等伯爵黑田清隆



官報抄録

親王樞密院會議ニ班列ノ儀昨十八日勅旨在ラセラレシカ京都在住ノ親王ハ參列ニ及ハサル旨同日御沙汰相成リタリ

聯元勲及殊達ノ人ヲ撰ミ國務ヲ諮詢シ其啓沃ノ力ニ侍ルノ必要ヲ察シ樞密院ヲ設ケ聯カ至高顧問ノ府トナサレトス茲ニ其官制及事務規程ヲ裁可シ之ヲ公布セシムサ一年四月廿八日

樞密院官制

第一章 組織

第一條 樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス

第二條 樞密院ハ第一議長一人第二宮議内一省三

○二十一年四月廿八日

樞密院官制及事務規程ヲ定ム

勅令 内閣總理大臣副署

第二十二号

朕元勲及練達ノ人ヲ撰シ國務ヲ諮詢シ其啓沃ノ力ニ倚ルノ必要ヲ察シ樞密院ヲ設ケ朕カ至高顧問ノ府トナサントス茲ニ其官制及事務規程ヲ裁可シ之ヲ公布セシムせ一年四月廿八日

樞密院官制

第一章 組織

第一條 樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス

第二條 樞密院ハ第一議長一人第二副議長一人第三

顧問官十二人以上第四書記官長一人及書記官數人ヲ以テ組織ス

第三條　樞密院ノ議長副議長顧問官ハ親任書記官長ハ勅任書記官ハ奏任トス

第四條　何人タリトモ年齢四十歳ニ達シタルモノニ非サレハ議長副議長及顧問官ニ任スルコトヲ得ス

第五條　議長ハ書記官ノ内ヲ以テ秘書官ヲ兼ネシムルコトヲ得

## 第二章　職掌

第六條　樞密院ハ左ノ事項ニ付會議ヲ開キ意見ヲ上奏シ勅裁ヲ請フヘシ

一憲法及憲法ニ附屬スル法律ノ解釋ニ關シ及豫算其他會計上ノ疑議ニ關スル爭議



二憲法ノ改正又ハ憲法ニ附屬スル法律ノ改正ニ關スル草案

三重要ナル勅令

四新法ノ草案又ハ現行法律ノ廢止改正ニ關スル草案列國交渉ノ條約及行政組織ノ計畫

五前諸項ニ掲クルモノヽ外行政又ハ會計上重要ノ事項ニ付特ニ勅命ヲ以テ諮詢セラレタルトキ又ハ法律命令ニ依テ特ニ樞密院ノ諮詢ヲ經ルヲ要スルトキ

第七條　前條第三項ニ掲ケタル勅令ニハ樞密院ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載スヘシ

第八條　樞密院ハ行政及立法ノ事ニ關シ天皇ノ至高ノ顧問タリト雖モ施政ニ干與スルコトナシ

## 第三章　會議及事務

第九條　樞密院ノ會議ハ顧問官十名以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第十條　樞密院ノ會議ハ議長之ニ首席シ議長事故アルトキハ副議之ニ首席ス議長副議長共ニ事故アルトキハ顧問官其席次ニ依リ首席スヘシ

第十一條　各大臣ハ其職權上ヨリ樞密院ニ於テ顧問官タルノ地位ヲ有シ議席ニ列シ表決ノ權ヲ有ス又各大臣ハ委員ヲ差シテ會議ニ出席シ演述及説明ヲ為サシムルコトヲ得但表決ノ數ニ加ラス

第十二條　樞密院ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス但可否平等ノ場合ニ於テハ會議首席ノ決スル所ニ依ル

第十三條　議長ハ樞密院ニ屬スル一切ノ事務ヲ總管シ樞密院ヨリ發スル一切ノ公文ニ署名ス

副議長ハ議長ノ職務ヲ輔佐ス

第十四條　書記官長ハ議長ノ監督ヲ受ケ樞密院ノ常務ヲ管理シ一切ノ公文ニ副署シ會議ニ付スヘキ事項ヲ審査シテ報告書ヲ調製シ會議ニ列シ辨明ノ任ニ當ル但表決ノ數ニ加ラス

書記官ハ會議ニ於テ議事ヲ筆記シ及書記官長ノ職務ヲ輔佐シ書記官長事故アルトキハ書記官之ヲ代理ス

前項ノ筆記ハ出席員ノ姓名會議ノ事件質問答辯及議決ノ要旨ヲ記載スルモノトス

第十五條　特別ノ場合ヲ除クノ外豫メ審査報告書ヲ調製シ其會議ニ必要ナル書類ト共ニ之ヲ各員ニ配

達シタル後ニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

議事日程及報告ハ豫メ各大臣ニ通報スヘシ

樞密院事務規程

第一條　樞密院ハ勅命ニ由リ會議ニ下付セラレタル事項ニ付意見ヲ述フ

第二條　樞密院ハ帝國議會若クハ其一院又ハ官署又ハ臣民ヨリ請願上書其他通信ヲ受領スルコトヲ得ス

第三條　樞密院ハ内閣及各省大臣トノ公務上ノ交渉ヲ有シ其他ノ官署帝國議會又ハ臣民トノ間ニ文書ヲ往復シ又ハ其他ノ交渉ヲ有スルコトヲ得ス

第四條　議長ハ樞密院ニ到達スル事項ハ書記官長ニ下付シテ之ヲ審査セシメ及會議ニ付スヘキ事項ヲ報告ヲ調製セシム



議長ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テ親ラ報告ノ任ニ當リ又ハ顧問官一人若クハ數人ニ之ヲ任スルコトヲ得ヘシ

第五條　審査報告書ハ報告員ヨリ之ヲ議長ニ提出スヘシ

臨時緊急ノ場合ニ於テハ口頭ヲ以テ報告ヲ為スコトヲ得此場合ニ於テハ其要領ヲ簡短ニ第八條ニ載スル件名簿ニ記入スヘシ

第六條　議長ハ審査報告書ヲ整頓スヘキ期日ヲ限定スルコトヲ得報告ハ成ルヘク速ニ之ヲ調製シテ遷延スルコトヲ許サス

内閣ハ至急ヲ要スル事件ニ付其由ヲ通知シ及其會議ノ期日ヲ限定スルコトヲ得

第七條　審査報告書ハ附屬文書ト共ニ其會議ヲ開ク
ノ日ヨリ少クモ三日以前ニ之ヲ各員ニ配達スヘシ
第八條　件名簿ハ會議ノ期日ノ順序ニ從ヒ之ヲ記入
スヘシ件名簿ニ登載スヘキ事項ハ第一事件ノ性質
第二會議ノ前文書配達ノ日時第三其會議ノ期日等
トス
會議ニ付スヘキ各件ニ就テハ前項ニ同シキ議事日
程ヲ調製シ其會議ヲ開クノ日ヨリ三日以前ニ各員
ニ通報スヘシ此通報ハ會議ノ招状ヲ兼ヌルモノト
ス
第九條　樞密院ノ會議ノ日時ハ議長之ヲ定ム但各大
臣ハ其日時ノ變更ヲ求ムルコトヲ得
第十條　樞密院ノ會議ハ左ノ規程ニ循由シ議長若ク



ハ副議長之ヲ整理スヘシ
書記官長又ハ書記官ハ其事件ノ性質ヲ簡明ニ演述
シ議決ヲ取ルヘキ要點ヲ辨明ス次テ各員ヲシテ自
由ニ討論セシム何人タリトモ議長ノ許可ヲ受クル
ニ非サレハ發言スルコトヲ得ス討論既ニ盡クルノ
後ハ議長ヨリ問題ヲ定メ左ノ順序ニ從ヒ表決ヲ為
サシム第一出席ノ各大臣第二席順ニ從ヒ列スル所
ノ顧問官トス議長ノ討論ニ參與スルハ其自由ニ屬
スルモノトス
議決ノ結果ハ議長之ヲ言明スヘシ
第十一條　議事日程ニ掲載シタル事件ノ會議其當日
ニ結了セサルトキハ之ヲ他日ニ延會スルコトヲ得
此場合ニ於テハ更ニ常例ノ定式ヲ踐行スルコトヲ

要セス

第十二條　樞密院ノ會議ノ意見ハ書記官長又ハ書記官表決ノ結果ニ依リ之ヲ起草シ議長ノ檢閲ヲ請フヘシ此意見ニハ理由ヲ附シ重要ノ事件ニ就テハ討論ノ要領書ヲ附屬スヘシ

反對ノ議論ヲ主持シタル出席員ハ其表決ト其理由トヲ議事筆記理由書又ハ要領書ニ記入セラレンコトヲ求ムルコトヲ得

第十三條　前條ノ意見ハ議長ヨリ天皇ニ上奏シ同時ニ内閣總理大臣ニ通報スヘシ

第十四條　樞密院ノ會議ノ議事筆記ハ議長及書記官長又ハ出席書記官之ニ署名シ其正確ヲ表明スヘシ



○十六年六月十三日

宮内省博恭王華頂宮御相續ニ付本日御移轉ノ旨ヲ稟報ス

宮内省稟報

博恭王今般華頂宮御相續被仰出候ニ付本日御引移相成候條此段御屆申進候也

十六年六月十三日

○十六年六月十一日

華頂宮愛賢王博恭ト改名ス

宮内省稟告

華頂愛賢王博恭ト改名ノ義被願出候処御允可ニ相成候條此段及御届候也

十六年六月十一日

○十六年二月十六日

三品華頂宮博厚親王昨日薨去ニヨリ東京府下並各地方三日間歌舞音曲ヲ停止ス尋テ豊島岡ニ埋葬スルヲ以テ當日大臣及勅任官等大禮服ヲ着用セシム

告示

第三號

三品博厚親王昨十五日午後九時薨去被遊候

右告示候事

布達

第四號

三品博厚親王薨去ニ付東京府下ハ本日ヨリ其他ノ地方ハ布達到達ノ日ヨリ三日間歌舞音曲停止セシム

右布達候事

宮内省稟告

三品博厚親王華頂宮過日来御病氣ノ処御養生不被相叶
昨十五日午後九時薨去相成候旨同宮御附ヨリ別紙ノ
通届出候間此段及御届候也十六年二月十六日

別紙

當三品宮去ル十二日以来御容躰別紙佐藤進ヨリ申出
候通リニ御座候処本日午後一時ヨリ俄ニ御異状相顕
レ醫療被尽候得共無其效午後九時薨去被遊候此段御
届申上候也

十六年二月十五日　華頂宮御附
正七位武田敬孝

宮内卿德大寺實則殿

當宮様御事去十二日以来御容躰別ニ著キ御異状不被
為入稍御衰弱被遊候様拜診罷在候処本日午前一時ヨ



リ御煩悶被遊續テ俄ニ搐搦御発ヒ呼吸困難昏睡ニ陥
リ夫々御手當差上候得共無寸効遂ニ午後九時御逝去
被遊候條此段申上候也

二月十五日　佐藤進

内閣書記官議按

三品博厚親王薨去ノ義別紙ノ通宮内省ヨリ届出有之
候就テハ左ノ通告示及布達可相成哉相伺候也十六年二月十
六日

宮内省稟告

故三品博厚親王華頂宮来ル廿日午前九時三十分御出
棺豊島岡ヘ御埋葬相成候同宮御附ヨリ別紙ノ通届出
候間此段及御届候也十六年二月十七日○内閣書記官主査陸軍省ヘ移牒海軍省ニハ関係無之ヲ以○海軍省ニハ関係無之件ニ付通牒ヲナサザリシ処南郷海軍書記官ヨリ為心得通牒相成度旨申

哉候ニ付其意ニ任セ通牒スベキモノニハアラサルヘシ
ノ例トナスヘキモノニハアラサルヘシ

別紙

三品博厚親王薨ル十九日午前九時御入棺廿日午前九
時三十分御出棺豊島郡豊島岡ヘ御埋葬相成候條此段
御届申上候也

華頂宮御附
武田敬孝

十六年二月十七日

宮内卿徳大寺実則殿

追テ御葬送筋別紙之通ニ候且御先駆方面監督壱人並
巡査長四人例ノ通被附候様致度其筋ヘ御達置奉願候
也

御葬送御道筋

華頂宮御邸ヨリ右ヘ聖坂ヲ降リ右ヘ左リ三田四国町
通リ育種場角右ヘ左ヘ松本町右ヘ左リ芝園橋ヲ渡リ
右ヘ芝公園地通リ旧御成門ヲ出斜メニ左ヘ愛宕下町
通リ新シ橋ヲ渡リ左ヘ内幸町通右ヘ外務省前通リ櫻
田門ヲ入左ヘ御堀端通リヨリ坂下門外夫ヨリ和田倉
門ヲ出左ヘ堀端通雉子橋門ヲ出左ヘ飯田町下通飯田
橋ヲ渡リ右ヘ船河原橋ヲ渡リ左ヘ江戸川端右ヘ左ヘ
水道町通リ右ヘ音羽町通リ豊島岡ヘ御順路

陸軍卿官房長ヨリ内閣書記官ヘ移牒

明後二十日

故博厚親王御葬送ニ付御通達之趣致承知候右ニ付テ
ハ陸軍兵隊為儀仗差出之義ハ別段御達不相成ニ付此
度ハ差出ニ不及候哉若儀仗兵可差出儀ニ候ハヽ即刻
其旨陸軍省ヘ御達相成候様致度此段一應及御問合候間

否折返シ御確答有之度候也十六年二月十八日

陸軍會葬式第一條ニ照準スヘキモノニ付特達ヲ要スヘキモノニ無之旨大生歩兵大尉ニ面談シ其事理ヲ承諾ス仍テ別ニ回答セス

陸軍大生歩兵大尉ヨリ内閣書記官ヘ回答

御問合之趣了承致候御達ヲ要セサル儀ニ付夫々取計致候此段及御回答候也十六年二月十九日

宮内省ヨリ内閣書記官ヘ移牒

故三品博厚親王御葬送来ル廿日午前九時三十分出棺豐島岡ヘ御埋葬相成候條両大臣初メ御官勅任官ノ輩ヘ為御心得御通知有之度候也十六年二月十七日大臣黒田顧問参議統計院長

追テ當日會葬者ハ上下黒服着用ノ筈ニ有之候間此段モ申添候也

賞勲局副長及参事院書記官ヘ通知濟

宮内省ヨリ内閣書記官ヘ移牒

明廿日故三品博厚親王御葬送ノ節會葬者ハ上下黒服着用ノ筈ニ有之候処右ハ大禮服着用ノ事ニ相成候間両大臣始御官勅任官ノ向ヘ為御心得御通知有之度候也十六年二月十九日○大臣公始夫々通知濟

内閣書記官ヨリ岩倉右大臣山縣參議ヘ移牒

電報

三品博厚親王昨十五日午後九時薨去 ~~十分~~ 其旨今日第

~~王歸ヲ以テ告示セラル~~ 又右ニ付東京府下ハ本日ヨリ

其他ノ地方ハ布達到達日ヨリ三日間哥舞音曲ヲ停止

~~セシムル~~ 旨第四歸ヲ以テ布達セラル 十六年二月十六日午后二時二

十分發

但山縣參議ヘハ福岡縣令ヘ宛左ノ添申ヲ加フ

山縣參議其他著次第左之趣至急通知アルヘシ

○十六年七月十一日

特旨ヲ以テ二品勲一等朝彦親王ヲ皇族ニ列ス

二品勲一等朝彦親王ハ達

特旨ヲ以テ二代皇族ニ被列候事

太政大臣ヨリ各参議ヘ達

久邇宮二品朝彦親王御儀ハ仁孝天皇御養子ニ被為在

御年齢殆ト耳順ニ被為及候故特旨ヲ以テ二代皇族ニ

被列候叡慮ニ付別紙御沙汰案回議ニ付シ候此段御承

知有之度候也十六年七月七日

内閣書記官議案

二品勲一等朝彦親王特旨ヲ以テ二代皇族ニ被列ノ事

十六年七月七日

○十六年二月十五日

博厚王ヲ親王ト為シ三品ニ叙ス

博厚王へ達

特旨ヲ以テ為親王被敍三品候事

博厚王へ宣旨

為親王

博厚王へ宣旨

敍三品

宮内省稟告

博厚王儀別紙ノ通被仰出候ニ付早々親王并敍品宣下相成候樣致度此段上申候也十六年二月十五日 官吏進退

博厚王

宮内省

聖上御艱子被仰出候事

○十六年二月十五日



○十六年四月廿三日

特旨ヲ以テ伏見愛賢王ヲ諸王ニ列シ華頂宮ヲ継續セシムル

愛賢王ヘ達

特旨ヲ以テ諸王ニ被列華頂宮相續被仰付候事

宮内省上申

三品博厚親王薨去相成候処御相續人無之ニ付今般二品貞愛親王庶出長男愛賢王ヲ右御相續人ニ被成度旨伏見華頂両宮御附ヨリ別紙之通出願相成候間願之趣被聞食御相續被仰付候様致度此段及上申候也十六年四月四日

先般三品博厚親王薨去被遊候ニ付當宮御庶子愛賢王御方御相續人ニ御貰請被成度旨故博經親王御息所ヨリ御所望相成候処従来深キ御續合モ被為在候義ニ付

御差遣被成度候條此段宜御執奏之程奉願候也

伏見宮御附

明治十六年四月二日　浅田濕光

宮内卿德大寺實則殿

三品博厚親王先般薨去被遊御相續之御方ニ不為在候
処伏見宮御義ハ故博経親王之御実家ニ付同宮愛賢王
御方御相續人ニ御貰受之義故博経親王御息所郁子御
方御願立相成候間此段上申仕候條何卒御情願之通御
允許相成候樣御執奏奉願候也

華頂宮御附

明治十六年四月二日　正七位武田敬孝

宮内卿德大寺実則殿

内閣書記官議案



伏見愛賢王華頂宮御相續之儀ニ付別紙之通宮内卿ヨ
リ上申有之候ニ付テハ左之通御沙汰相成可然哉照
ヲ具シ此段相伺候也

六年四月四日



宮内省

○十六年十二月十三日

終身華族一代華族ノ差別ヲ示ス

宮内省ヨリ内閣書記官ヘ照會

華族中終身華族ニ被仰付候者ト一代華族ニ被仰付候者有之候処右者一代華族ニ中ニ限リ終身華族ハ隱居候共其身存生中ハ華族ノ義ニテ幾分カ厚薄有之義ニ候哉民法上何程之別有之候哉及御質問候條至急御回答有之度候也

十六年十二月八日

追テ去ル十三年十一月従四位酒井忠績酒井忠惇一代限華族ニ（被別度宮内省ヨリ上申候処終身華族ニ）被仰付候義モ有之候間為念申添候也

内閣書記官ヨリ宮内書記官ヘ回答

終身華族一代華族差別之儀ニ付御照會之趣承知致候右

ハ御見解ノ如ク一代華族ハ戸主中其族ヲ有シ終身華族ハ隠居候トモ存生中其族ヲ有スル儀ト存候此旨及御答候也十六年十二月十三日

○十四年十月廿日

菊麿王ヘ達十四年十月二十日

特旨ヲ以テ諸王ニ被列為賄料一ヶ年金壹万貳千圓下賜候事

宮内省ヘ達

菊麿王ヘ別紙ノ通御沙汰相成候條此旨相達候事

宮内省伺

二品守脩親王今般薨去候処同宮御儀ハ二代目ヨリ賜姓華族ニ被列候旨明治三年御沙汰ノ趣モ有之候ニ付テハ同宮継嗣菊麿王ハ如何御処置相成候哉此段相伺候也十四年九月二日

德大寺宮内卿ヨリ三條太政大臣ヘ回答

九月十二日ノ貴翰拝誦聖上益御機嫌能日々御巡幸被

遊候事御同情恐悦ノ至ニ候閣下弥御安泰御鞅掌奉遥
賀候供奉一同健康ニ罷在候間御放念奉願候扨梨本宮
御継嗣ノ事ニ付當省伺書御差越縷々御細示ノ趣逐一
及奏聞候処四五日御勘考ノ末昨夜如左御沙汰有之候
久通宮御願書並東伏見伏見両宮ノ御情願モ有之候ヘ
共梨本宮ハ従来病人ノ事華頂山階宮等ノ御功勞モ無
之成規ノ如ク華族ニ被列勿論ニハ候ヘ共特旨ヲ以テ
諸王ニ列セラレ候旨御治定被仰出候間此旨及拝答候
匆々不結十四年九月廿五日
二伸両羽州辺ハ餘程冷氣相催大ニ凌克相成候供奉
一行更ニ痛者モ無之安心ノ事ニ御座候
別紙二葉返呈仕候
久通宮願宮内御苑



残暑難堪候処聖上益御機嫌能被為成恐悦御儀奉存候
二ニ貴官弥御安泰被成御供奉不堪歓賀ノ至存候然ハ
今般梨本宮薨逝ニ付卒尓ノ至恐入候ヘ共不得止事情
懇願ノ為小藤孝行差出候仔細ハ故守脩儀積年ノ病體
ニテ朝家ノ御為何ノ功勞モ無之候処皇親ノ廉ヲ以テ
親王宣下勲章迄モ下賜一家被召建候朝恩ノ優渥ニ対
シ万一ノ報効モ不相立終ニ物故致シ朝彦ニ於テモ深
ク恐縮遺憾ニ不堪奉存候然処守脩儀ハ實子無之去ル
明治八年三月山階二品宮實子菊麿ヲ養子ニ相願御聞
済ノ上手元ニ引取養育致シ候儀ハ他日家名相續内願
ノ主意ニ有之候處右等出願ノ運ニモ不到内今日ノ異
変ニ及ヒ朝彦親戚ノ情誼傍観ニ不忍依之甚畏入候ヘ
共菊麿ヲ梨本宮相続人ト相定メラレ皇族ノ末ニ被列

候様被仰付被下候ハヽ特別ノ鴻恩朝彦ニ於テモ感戴
無極故守脩地下ノ神靈モ感泣瞑目可仕菊麿ニ於テハ
一層奮發學業勉励致シ成長ノ後ハ治埃ノ報効モ為仕
度不堪懇願ノ至奉存候尤華頂宮山階宮等二代ノ皇族
ニ被列候ハ多少ノ功勞ニ對セラレ特旨ヲ以テ被仰出
候儀ニ付此前輙ニ比較シテ歎願致候趣意ハ万々無之
候ヘトモ親戚ノ情誼難黙止内願ニ及候條御憐察ノ上
非常ノ御高配ニ預リ度此段相願候也 十四年九月一日

内閣書記官議案

梨本宮薨去ニ付継嗣菊麿王諸王ニ被列賄料下賜ノ事

四親王家ノ外新ニ御取立相成候親王家ハ二代目ヨリ
賜姓華族ニ可被列旨別紙參照ノ通兼テ御達有之候処
先般特旨ヲ以テ東伏見宮ハ世襲皇族ニ山階華頂両宮



ハ二代目皇族ニ被列候右ハ孰レモ御功勞ノ廉ニ被為
對御沙汰相成候儀ニ可有之然処今般梨本宮薨去ニ付
テハ継嗣菊麿王ハ賜姓華族ニ可被列ノ処同宮ハ著シ
キ御功勞ハ不相見候ヘ共維新ノ際外宮方一同新ニ皇
族ニ御取立ニ相成御老年ニ及ヒ薨去被遊候儀ニモ有
之二代目ヨリ直ニ降シテ臣下ノ列ニ被加候儀ハ御情
義ニ於テ難被為忍御義モ可有之且諸宮ヨリ御内願ノ
次第モ有之旁特旨ヲ以テ菊麿王ハ諸王ニ被列従前下
賜候御賄料壹万八千圓ノ三分ノ二即チ一ヶ年金壹万
弐千圓下賜候様可被仰付哉御達案取調相伺候也 十四年九月十

日大蔵省并會計検査院ヘ通牒

内閣書記官議案

梨本宮継嗣菊麿王御處置ノ事

二品勲一等守脩親王薨去ニ付継嗣菊麿王御処置ノ儀
別紙ノ通宮内省ヨリ上申有之候処右ハ別紙甲号参照
ノ通明治三年御達ノ趣有之ニ付賜姓華族ニ可被列儀
ニ候ヘ共是等ノ儀ハ宸裁ニ可出儀ニ付何分ノ御沙汰
奉伺候也　十四年九月十三日
但乙号参照書ノ儀ハ一旦宮内卿ヨリ伺出ノ末省議
ノ次第有之引下候モノニ候ヘ共為御参考附添致置
候也（甲乙参照書略之）

甲
参照

明治三年十二月十日
今般御改正ニ付テハ四親王ノ外新ニ御取立相成候親
王家ノ儀ハ二代目ヨリ賜姓華族ニ被列候事
同年十一月

同年十一月
山階東伏見梨本三宮ヘ達
二代目ヨリ賜姓華族ニ被列候事
同五年三月廿四日
三品伏見能久ヘ達
思召ヲ以テ北白川宮相續被仰付候事
三品北白川能久ヘ達
二代目ヨリ華族ニ被列候事
同九年四月廿一日
三品親王華頂博経ヘ達
積年深ク國事ヲ憂慮シ維新ノ後米國ニ渡航シ専ラ海
軍學術ヲ研究シ以テ國家ニ報効セントヲ鋭意徒學ノ処
不幸ニシテ病痾ニ罹リ帰朝後益々不癒久シク病床ニ

在リテ其素志ヲ達スルヲ得ス深ク悶然ニ被思召特旨
ヲ以テ嗣子博厚皇族列ニ被仰付候事
同十四年二月五日
二品勲一等嘉彰親王
特旨ヲ以テ自今世襲皇族ニ被列候事
二品勲一等晃親王
特旨ヲ以テ二代目皇族ニ被列候事
同五年正月六日
伏見朝彦ヘ
依思召自今宮ト可称旨御沙汰候事
敍三品
同八年四月十四日
三品朝彦王



今般特別ノ思召ヲ以テ一代宮被仰付賄料トシテ當四
月ヨリ一ヶ年金四千六百五十二圓被下候事
宮内省上申

乙 叅 黙

往古ハ親王諸王ノ制有之候処維新前後山階勧修寺久
邇初青蓮院宮ト称シ還俗后中川宮ト称シ及東伏見仁
更ニ賀陽宮ト改メ現今久邇宮ト称ス
和寺梨本梶井北白川聖護院華頂知恩院ノ六宮復飾ノ
上新ニ宮家ニ御取建相成候ヘ共右御家ハ二代目ヨリ
賜姓華族ニ列セラルヘキ旨去明治三年十二月御達相
成候ニ付テハ山階以下諸親王ノ嫡子ヲ初メ渾テ臣籍
ニ列セラルヘキ筈ニテ皇親御待遇上ニ於テ甲乙甚タ
懸絶シ現今種族ノ類別ニ於テ親王家ノ外ハ臣民タル
華士族平民ノミニテ穏當ナラサル様被存候且今後ハ

従前ト違ヒ逐年皇親御繁榮在ラセラルヘク旁以テ此際諸王家ノ制ヲ設ケラレ親王家ヨリ諸王家諸王家ヨリ華族ト皇親ノ親疎ニヨリ漸次遞降候樣相成候方種族一般ノ位置ニ於テ体裁宜シク皇室御輦固ノ基ト存候將又桂有栖川伏見閑院ノ四宮ハ従前ヨリ皇統御扣ノ御家ニ被定候方現實皇統ヲ重セラレ候筋ニ之レアルヘク且亦親王家諸王家トモ追々御子女御繁榮相成ルヘキニ付嫡子女御處分ノ儀御豫定有之度依テ別紙ノ件々取調上申候條御審議ノ上御裁定相成度候也

年十一月十五日

追テ別紙ニ掲載スル金員ハ其節々政府ニ於テ別途御支出可相成心得ニ候間此段為念副申候也

親王家

右ハ現今桂有栖川伏見閑院ノ四宮ヲ稱ス但桂宮ハ御女儀タルニ依リ系統ヲ以テ相続セラルヘキニ非ス然レ𪜈今後皇胤御繁榮ノ上ハ皇子方ノ内ヨリ該宮御相續在ラセラル可キニ付該宮モ親王家ニ加ヘラレ右四宮ヲ以テ現今皇統御扣ノ家ト定メ嫡子ハ御代々天皇ノ御養子トナシ親王宣下アルヲ以テ定例トス尤皇子御繁榮ノ上ハ其御直宮ヲ以テ皇統御扣ノ家トナシ桂有栖川伏見閑院四宮ノ内尤皇統ニ遠キ方ヲ諸王家トナシ（御直宮御一人ナレハ四宮ノ内一家ヲ諸王家トシ御直宮御両人アレハ四宮ノ内両家ヲ諸王家トシ皇統御扣ノ家ハ四宮ノ数ヲ爵ヘス）諸王ニナラセラレシ御方ヨリ四代目迄ハ諸王五代目即嫡玄孫ニ至リ華族ニ列セラレ家産トシテ現金拾万圓下賜度候事

諸王家

右ハ現今ノ山階東伏見梨本久邇北白川華頂ノ六宮ヲ
称ス右六宮ハ二代目ヨリ華族ニ列セラルヽ旨曾テ御
沙汰有之候処既ニ華頂宮初代博経親王薨去ノ際二代
目博厚王特旨ヲ以テ皇族ニ列セラレ候ニ付テハ即今
之ヲ諸王家トモ可申付テハ今後右六家ノ嫡子嫡孫嫡
曾孫迄皇族ニ列セラレ諸王ノ地位ニ置セラレ五代目
即嫡玄孫ヨリ華族ニ列セラレ家産トシテ現金七万圓下
賜度候事

親王家二男以下

右ハ桂有栖川伏見閑院四宮ノ二男以下丁年即満廿年
ニ達シタル上華族ニ列セラレ家産トシテ現金五万圓
下賜度候事

但今後御直宮ノ親王家ニ於テモ其二三男ハ本文ニ



準ス

諸王家二男以下

右ハ山階東伏見梨本久邇北白川華頂六宮ノ二男以下
丁年即満廿年ニ達シタル上華族ニ列セラレ家産トシ
テ現金三万圓下賜度候事

親王家女子

右ハ相當ノ諸家ヘ縁組相成ルヘク其節私産トシテ金
七千圓下賜度候事

諸王家女子

右ハ相當ノ諸家ヘ縁組相成ルヘク其節私産トシテ金
五千圓下賜度候事

諸王敍品

右ハ従前親王ハ敍品諸王ハ敍位ニ候処今般諸王家ヲ

設ケラルヽ上ハ臣民ト其地位ヲ異ニスルタメ敍品ニ
定メラレ候方可然候事

親王家諸王家嫡子ノ外子女等得度

右親王家諸王家共嫡子ヲ除クノ外ハ子女等佛教御執
心ノ方ハ丁年満即二十年ニ達シタル上得度差許サレ
候テ可然候事



○十四年十一月廿二日

梨本菊麿王宮ト稱ス

宮内省伺

菊麿王今般特旨ヲ以テ諸王ニ被列候旨被仰出候処従
来ノ通梨本宮ト相稱候テ可然儀ニ候哉又ハ宮号ハ不
相用方ニ候哉是迄確タル例證モ無之ニ付相伺候條至
急何分ノ御指令有之度候也 十四年十一月四日

伺ノ趣従来ノ通宮ト稱スヘキ事 十四年十一月廿二日

内閣書記官議案

別紙宮内省伺菊麿王特旨ヲ以テ諸王ニ列セラレ候ニ
付宮号ヲ稱シ可然哉否ノ儀右謹テ按スルニ本来宮号
ハ皇族ノ尊稱ニシテ皇族ノ中ニ親王諸王ノ區別有之
儀ト存セラレ候依テ宮号ヲ称シ御差支無之儀ト存セ

宮内省

ラレ候ニ付左ノ通御指令可相成哉仰高裁候也十四年十一月
九日



○十三年十一月廿七日
三品威仁親王生母則子取扱方ヲ權掌侍ニ準ス

宮内省届

三品威仁親王生母
京都府士族
森房太郎叔母
森　則子

右ハ威仁親王先般二品熾仁親王之継嗣被仰出候処従
前親王家御當主及御継嗣之生母ハ堂上ノ猶子トナリ
身分ハ殿上人ニ準シ被取扱候慣例ニ付テハ右則子義
當今ノ儘侍婢ノ姿ニテハ不都合不少候條身分御取扱
方熟考候処従前殿上人ハ四位五位ノ輩ノ總稱ニテ御
取扱振ハ略即今ノ奏任官ニ相當候義ニ付右則子儀ハ

權掌侍ニ準シ取扱候テ可然ト存シ其旨本人ヘ相達候
此段及御屆候也



○十三年五月十八日
宣旨十三年五月十八日
三品勲一等守脩親王
三品勲一等朝彦親王
三品勲一等能久親王
敘二品
梨本三品守脩親王
圓滿院入道無品覺諄親王二品宣下
安政三年十二月十五日
久邇朝彦親王
一乘院入道無品尊應親王二品宣下
嘉永元年
弘化五年二月十八日

宮内省

北白川能久親王

輪王寺入道二品公現親王一品宣下

文久四年十二月四日



○十三年九月十三日

伏見宮諄女王法體ノ願ヲ許ス

宮内省伺

伏見宮諄女王御法體之儀ニ付別紙寫ノ通該宮御附浦田長民ヨリ願出候処御當人儀ハ御女儀且御高年之儀ニモ有之候間被聞召候テ可然ト存候此段相伺候條早々何分ノ御指令有之度候也　十三年九月三日

願ノ趣被聞食候事　十三年九月十二日

伏見宮御附　浦田長民願　宮内省宛

當宮御伯母宗諄宮御儀先年山城國愛宕郡鹿ヶ谷村靈鑑寺御住職御座候處明治六年八月當宮ヘ御復帰被仰付其後引續同寺ニ御寄留被致候然ルニ同宮御儀御高年ニモ被為在且豫テ佛門御帰依之御事故今般更ニ御

法体之儀御許容相成候様被相願度候間可然御取計之
程奉願候也　十三年八月三十一日

今般　皇族家事向改正被仰出候ニ付自今寺門ヲ離レ
伏見家ヘ復籍之上従前之賜米相廃シ以来賄料トシテ
更ニ一ヶ年金五百円宛被下候事
但本年ハ當七月ヨリ賄料ニ替可賜事

明治六年七月卅一日　大政官印

伏見宮系譜書抜

十九代

伏見貞敬親王

第八女

宗諄号萬志宮

母昌子

文化十三丙子年十一月廿七日誕生

文政二己卯年六月廿七日　光格天皇御養子
靈鑑寺為附弟

同六癸未年十月十三日　入寺

同月十四日　得度八歳

明治四年辛未十一月七日　靈鑑寺宮宗諄
今般思召ヲ以テ終身現
米百石被下候事
太政官

明治六年七月三十一日　靈鑑寺宗諄宮
今般皇族家事向改正被仰
出候ニ付自今寺門ヲ離レ伏見
家ヘ復籍之上従前ノ賜米廃シ

先般
皇族方賄向総テ於當省引受取扱候様御達相成以来家
事其他日用之事苦迫及見聞候処実ニ不体裁之廉不勘
右ハ全ク家禄寡少所帯難渋ヨリ相生候訳ニテ不得止
事柄ニ有之候間特別ノ御詮議ヲ以テ従前ノ家禄ヲ被
廃更ニ別紙積書之通賄料別途御渡方相成候ハヽ向後
不体裁無之様注意取扱可致候此段至急御沙汰之程相
願候也

以来賄料トシテ更ニ一ヶ年金五百四ツヽ被下候事
但本年ハ当七月ヨリ賄料ニ替可賜事

明治六年七月四日　宮内卿德大寺實則

太政大臣三條實美殿

伺之趣聞届別紙之通相達候條是迄其省ヘ渡来候

皇族家禄未相廃シ其省定額當七月ヨリ一個年未二千
七拾六石相減金六万四拾四相加候條右ヲ以テ賄向一
切可取扱事

明治六年七月廿一日　太政大臣三條實美印

法制部議案

別紙宮内卿伺伏見宗諄女王御法体ノ儀ヲ審案スルニ
明治二年四月十七日宮堂上方ノ庶子等追々其材ニ隨
ヒ御登用可有之候間以来僧徒ニ致ス間敷様被仰出候
得共御女儀御得度ノ儀嘗テ御禁令モ無之殊ニ該宮ノ
儀ハ御幼年ノ時ヨリ佛門ニ入セラレ明治六年七月三
十一日皇族家事向御改正ノ為メ伏見家ヘ復籍被仰出

候後モ引續キ寺院ニ御寄留被致且御高年ニモ被為在
候ニ付御法体ノ儀ハ速ニ御聽屈相成候方可然存候由
ニテ左案調査仰高裁候也十三年九月十一日



○十三年十月十九日

伏見文秀女王法體ノ願ヲ允サル

宮内省伺

伏見文秀女王御法體ノ儀ニ付別紙写之通該宮御附浦
田長民ヨリ願出候處先般宗淳女王御法躰ノ儀モ既ニ
被聞食候ニ付テハ同樣被聞食候ヲ可然ト存候此段相
伺候條早々何分ノ御指揮有之度候也十三年十月一日

願ノ趣被聞食候事十三年十月十九日

伏見宮御附浦田長民願宮内省宛

當宮御姉文秀宮事儀先年大和國添上郡山村圓照寺御
住職ニ御坐候処明治六年八月當宮ヘ御復帰被仰出其
後引續キ同寺ニ御寄留御願濟相成候然ルニ同宮御儀
兼ヲ佛門御帰依ニ候上追々御年ヲ被為召候ニ付今般

更ニ御法體御初志ヲ被遂度御請願ニ候間何卒此段
特旨ヲ以テ被為聞食候様被相願候條可然御執計ノ
程願上候也十三年九月三十日

内閣書記官議案

宮内省伺伏見文秀女王法體願ノ事

右ハ御幼年ノ時ヨリ佛門ニ入セラレ明治六年伏見宮
ヘ御後帰ノ後モ引續キ寺院ニ御寄留被成且御高年ニ
モ被為在又過般伏見宗諄女王法體被願食候例モ有之
候間御允許可相成哉相伺候也十三年十月四日



○十一年八月廿三日

皇族親王宣下敍品及丁年大禮服等ノ事ヲ候又

宮内省伺

一聖上御養子親王宣下等ノ節ハ宮内卿ヨリ藩府縣一
般ヘ布達候様致度候事

一皇族敍品以前大禮服着用朝儀ニ被臨候ハ不得其躰
裁儀ニ付自今ハ丁年ニ至テ敍品宣下相成候方可然
尤皇族丁年ノ儀本邦ニ於テハ未タ御一定無之處歐
洲帝國ニ於テハ皇族ハ滿十八年ヲ以テ丁年ト致候
向モ有之候趣ニ付本邦ニ於テモ皇族丁年御議定相
成度候事

一聖上御養子御願濟ノ皇族親王宣下ノ次第別紙ノ通
式部寮ニ於テ為取調候間可然御指揮被下度候事

右ノ件々相伺候條至急何分ノ御指揮相成度候也 十一年七月五日

宮内

第一條 伺ノ通

第二條 一皇族丁年ノ儀追テ御沙汰ニ可被及事

一親王宣下即日叙品ノ事

但皇族大禮服ハ丁年ニ不拘親王宣下若シ

ハ叙品ノ上著用ノ事

第三條 伺ノ通 十一年八月廿三日

式部寮伺

親王宣下次第別紙ノ通取調仰高裁候也 十一年五月廿四日

親王宣下次第

一宮内省兼日侍講ヲ召テ御名字ヲ勘セシム

先例清菅両氏ノ儒臣之ヲ勘進ス



一宮内省日ヲ定メテ其日親王宣下御内慮ノ旨ヲ某王ハ通申ス

一式部頭太政大臣ノ命ヲ奉シテ其日午前何時參内有ルヘキ旨ヲ某王ハ通達ス

親王大臣參議宮内卿輔同時參内ノ事式部頭之ヲ催ス

一當日内廷ヲ補設ス

一某王參内

一某王及親王大臣參議宮内卿輔參内ノ旨式部頭之ヲ奏ス

親王以下諸員大禮服著用

一出御

親王大臣參議宮内卿輔左右ニ侍立 大臣參議左ニ立ツ

一勅宣親王ト為シ名某ト賜フヘキ旨

某親王謹テ奉ス

此時太政大臣宣旨及御名字ノ一紙ヲ授ク親王之ヲ受テ退ク

一入御

一某親王宮内卿ニ附シ拜謝ス

一某親王退出ノ時其邸迄近衛騎兵隊護送ス

宮内省申牒

御養子親王宣下等ノ儀ニ付昨日伺書差出候ニ付テハ別紙歐洲各國皇族丁年取調書一括御参考ノ為メ差進候也七月六日

外務省回答宮内省宛

歐洲各國ニ於テ人民一般丁年ノ制ハ一定可有之候



ヘ共皇族ノ儀ハ人民ト違ヒ別ニ丁年ノ定有之候哉

云々十一月二十日附ヲ以テ御問合ノ趣致承知即チ

取調候処皇帝ニ至リテハ別紙譯文ノ通リ澳國及ヒ

巴西國等未タ丁年ニテモ丁年ニ達セル旨ヲ布告シ

即位ノ禮ヲ被執行候事ステーツメンスエールブック

中ニ相見候ヘ共皇族ノ儀ハ判然不致察スル処皇族

ハ丁年ノ制人民ト一般ニ可有之歟其邊次便在外我

公使館ヘ申遣シ各國ノ制方為取調可申候間右回報

有之次第可申進候且十月二十六日附ヲ以テ御申越

ノ廉々モ即今明瞭ニ不至候間前條同様在外公使館

ヘ問合候上否可申進候其段御諒知有之度一應ノ貴

答迄如此候也十年十二月八日

ステーツメンスエールブック抜抄

澳地利皇帝

一千八百三十年八月十八日生誕ニ達セル旨ヲ告

一千八百四十八年十二月一日丁年ニ達セル旨ヲ告テ一千八百四十八年十二月二日即位ノ事ヲ布告ス

巴西皇帝

一千八百二十五年十二月二日生誕

一千八百三十一年四月七日踐祚

一千八百四十年七月廿三日丁年ニ達セル旨ヲ告ケ一千八百四十一年七月十八日即位ノ大禮ヲ執行ス

澳國在勤本間書記官取調書

歐洲各國ニテハ丁年以下ノ者朝廷ノ禮式ニ關シタル禮服ヲ著シ其禮式ニ臨ムコトアリヤ

答

否

最モ丁年已下ニテモ士官ナルカ或ハオルテレスリツテル貴族協會ノ服ヲ著スル者ナレハ朝廷ノ禮式ニ臨ムコトアリ

但朝廷ノ禮式ニ關シタル禮服トテハ別ニ無之只官服カ或ハ前ニ云所ノ協會ノ服而已

丁年以下ノ者ニ我日本國ノ位階ノ如キモノヲ授與スル事アリヤ

答

否

勿論我位階ノ如キモノハ當國ニハ無之然シケハ

イムラート（参議）ケンメール（侍従）トルーフセツセル（給仕）等ノ如キ官名ヲ爵位ト成リシモノ有之如此爵位ハ丁年以下ノ者ニ授與セス尤モエーデルクナーベ（稚子ノ如キ者ニ帝ト云フ）（右ノ左右アルモノ）名称ヲ尚貴族學校ニ在ル所ノ少年ニ授與スルヿアレドモ之ハ真ノ位階ニアラス畢竟役名ニシテ大礼式ノ時ハ其役ニ従事ス（譬ヘハ皇后ノ長裳ヲ執ル等）

皇族ハ即我國ノ宮方丁年以下ニテモ礼式ニ関シタル礼服ヲ著シ朝礼ニ臨ム事アリヤ

答

否

但皇族ノ服トテハ別ニ無之

帝王ハ丁年以下ニテモ帝位ニ登ル時ハ丁年以下ニ



テモ帝王ノ服ヲ著スルヤ又ハ丁年ニ至リテ其服ヲ用ユルヤ

答

否

丁年ニ至リテ始テ帝位ニ登ル

但帝ノ服トテハ別ニ無之常ニマルシヤルノ軍服カ又ハ親ラ管轄スルトコロノ聯隊ノ服（騎兵ナリ）（歩兵ナリ）ヲ著ス

尤モ別ニオルナトト云帝王ノ服アレトモ之ハ即位ノ礼式ニ用ユル而已

歐洲各國ニ於テ人民一般丁年ノ制一定ノ儀ト存候ヘ共皇族ノ儀ハ人民ト違ヒ別ニ丁年ノ定有之候ヤ

答

澳國ノ太子ハ二十年ヲ丁年ト定ム若モ先帝薨シ嗣位ヲ促ス如キ非常ノ事アル時滿十六年ヲ以テ丁年ト為ス

皇族ハ人民ト一般ニ二十年ヲ以テ丁年ト定ム

一伊多利國憲ニテハ國王ハ十八歳ヲ以テ成年トス（伊國在勤）櫻田臨時代理公使取調書

一丁年以下ノ者王族タリトモ朝廷ノ礼式ニ関シ別段ノ礼服ヲ著スルコトナシ乍去王族ハ丁年以下タリトモ多分武官ノ名義ヲ帶候ニ付礼式ノ節ハ其武官相當ノ服ヲ著用ス其前ハ別ニ王族ノ礼服トテハ無之事

一丁年以下タリトモ各國ヨリメダイユヲ送ル節ハ受納スルヿアリ又外國ヘ授與スルヿモアリ



既ニ當國太子ナーブル殿下ニハ八歳ナレトモ獨乙國并チユニー國ヨリハメダイユヲ送リ受納ニ相成候事

一當國ノ憲法ニテハ丁年以下（十八歳以下）ニテ王位ニ登ルヿナシ因テ丁年以下ニテ國王ノ服ヲ著スルヿナシ

右ノ通ニ有之候此外何等細密ノ儀宮内省ニテ入用有之候ハヽ當國憲法ヲ書接差出候樣可致候也（二月）

（普國在勤）青木公使取調書

一普國ニテハ人民一般ノ丁年ハ滿二十一年ト相定乃チ二十一歳後ハ兵役ニ丁リ且諸般ノ呼為ヲ自己ノ定位ニ決スル事ヲ得候處（但シ民撰議員ニ撰ラハレ且員ヲ撰挙スルヿハ滿二十五歳ニテ始メテ此權利ヲ得ルノ制ナリ）皇族ニ限リ滿十八歳

ヲ以テ丁年ト相定リ乃チ有此齢皇族ハ非常ノ國議會ニモ參與相成候事

一丁年以下ノ輩朝廷ノ礼式ニ関シタル禮服ヲ著シ其礼式ニ臨ム事尋常無之ト雖モ武官ハ此例ニ非ス有技能者ハ丁年以下ニテ士官（但少尉ヲ云フ）タルヲ得ルニ付朝廷ノ大礼式ニ臨ミ候事

但シ普國ニテハ文官ハ中等以上武官ハ海陸軍少尉以上総テ參朝被差許候例ナリ

一丁年以下ノ輩我日本國ノ位階ニ類スル顕表ヲ得ルノ例ナシ其丁年以下ニテ被任武官候節ハ大概ネ少尉ノ官ヲ得候ヘ共別ニ正八位等ノ位階ヲ得ルコトナク且公侯伯子男ノ爵位ニ敘セラルヽヿナシ尤其氏生前國家ニ大功等アリト雖モ未タ其



功ヲ賞セラレスシテ死没スルトキハ其子（未タ丁年ナラスト雖モ）タル者間〻子男ノ爵位ヲ得貴族ニ列スルヿアリト雖モ此例極メテ稀ナリ

一普國ニテハ皇族ハ総テ武官ト相成ル旧例ナリ故ニ宮方ハ齢十六七ニシテ已ニ少中尉ニ列候間朝礼ノ毎ニ乃チ軍服ヲ著シ其式ニ臨メリ

但軍服ハ即礼服タルヲ以テ別ニ朝服アルニ非ラスト雖モ皇族ハ最初ヨリ高上ノ勲章ヲ佩帯シ威儀自ラ判然ナリ

一普國ニテハ帝王タルヘキ者其丁年（満十八歳ニ即アラサレハ）住セス且帝王ノ服ハ即大将ノ軍服タルヲ以テ丁年前此服ヲ著用スルコトナシ

但シ大将ノ服ハ即「フイルドマルシヤル」ノ服ニ

テ帝王一人ノ定服ニアラス自他ノ大将亦之ヲ
著用スト雖モ帝王ハ諸勲章ノ持主タルヲ以テ
毎ニ最上ノ勲章ヲ佩帯シ威儀礼装是ニ由テ判
然タリ

法制局議案ナ一年八月十四日

別紙宮内省伺御養子親王宣下等ノ儀勘査候処左ノ
通

第一條　申出ノ通ニテ別段無異議

第二條　本條ハ皇族丁年ノ事叙品ノ事大礼服ノ事
トノ三項ニ分チ逐項之ヲ審議スル左ノ如シ

一丁年ノ事

皇族ノ為メニハ別段丁年ノ制ヲ定ムルニ及ハ
ス何トナレハ本邦皇族ハ欧洲各國ノ皇族ト同



論シ難キモノアリ即チ御遠親ノ方ヲモ皇族ニ
列セラル一ナリ之ヲ君列ニ加フヘカラス二ナ
リ一ツ御養子ヲ被仰付三ナリ右等ニ就テ考フ
ルニ臣民一般ノ丁年ニシテ毫モ差支アルヿナ
シ若シ大統ヲ継カセラル等ノ事アル時ハ其為
メ別段ノ制アルヘキナリ

一品位ノ事

今以来維新前迄ハ親王ニ限リ叙品ノ典アリ諸
王ハ皆位ヲ以テ叙セラレシノミ然ルニ維新以
降右ノ典ヤヽ紊レ一般皇族ニ叙品アルノ例ヲ
成セリ然レトモ幸ニ一二ノ御方ニ過ギサレハ
向来右様親王ニアラサル方ヘ叙品ノ事ハ無之
様致シ度其年齢如何ニ於テハ御養子トモ被為

成候上ハ御幼稚ニテモ親王宣下濟ノ上ハ直ニ
叙品其他ハ叙位被為在何等不都合無之存候

一大礼服ノ事

皇族ニ於テノ大礼服ハ素ヨリ他ノ官服位服ト
殊ニシテ族服ト定メラレシモノナレハ一般皇
族御着用無差支筈ナレトモ又御幼稚ノ内ハ別
ニ朝儀大典ニ列セラル、ヿナキヲ以テ親王宣下
若クハ叙品叙位アル上ニテ御着用相成ルヘキ
ニ内決アラセラルヘク然ル時ハ都テ御内意ノ
節ヨリ豫メ之ヲ調製シ宣下濟シ直チニ之ヲ御
着用相成候ヘハ躰面ニ於テモ近衛騎兵護衛ノ
式トモ相適シ可然存候
右ノ如クナルカ故ニ丁年ノ事ハ叙品ト大礼服



トニ関係セスシテ可ナラン尤モ是等ノ事ハ軽
易ニ議定スヘキニアラス唯聞ク処ニ於テハ某
宮方親王宣下ノ事差迫リ居候趣ニ付差向キ同
宮方ハ前議ノ如ク御治定相成親王宣下同日叙
品被為在可然ト勘考候也

第三條　親王宣下式次第ノ儀ハ式部寮勘申スル処
不都合ノ廉モ不相見其第一項ニ名字勘進ノ事清
営両氏ニ仰スノ先例ヲ附記セリ是等ハ内廷ノ御
都合ニ任セラレ差碍無之候ヘトモ侍講侍讀等ヲ
シテ撰定セシメラレ必シモ旧例ニ拘ハルニ及ハ
スト存候此段添テ申上候也

右等ハ總テ御達案御指令按ヲ調製スヘキ事項ニア
ラサルヲ以テ勘査ノ大畧ヲ記シ仰上裁候也八月十四日

○十一年五月十七日

有栖川二品宮實弟稠王ヲ聖上ノ御養子トシ以テ継嗣タラシメンヿヲ請フ勅許セラル

宮内省伺

別紙ノ通有栖川二品宮ヨリ願書被差出候間可然御評議相成度此段申進候也　四月三十日

別紙願ノ趣被聞召候事　五月十七日

二品熾仁願　宮内省宛

謹テ白ス熾仁皇親ニ班列シ聖恩ノ優渥ニ沐浴スルヤ厚シ熾仁今年四十有余不幸ニシテ一子ヲ得ス顧フニ誰ニ依テ後事ヲ托シ累世ノ聖恩ニ報酬スルヲ得ンヤ熾仁幸ニ實弟稠アリ年已ニ十有六仰願クハ眷顧ヲ垂レ先例ニ倣ヒ稠ヲ以テ

聖上ノ御養子トシ以テ熾仁ノ継嗣トナサシメ賜ハン
ヿ懇願ノ至リニ堪ヘス依テ冀クハ執奏アランヿヲ頓
首拝　四月廿九日

大臣上奏

二品熾仁親王御継嗣願左ノ通宮内省ヘ御指令相成可
然哉仰高裁候也　五月十一日



○十一年八月二十四日

式部寮ヘ達

有栖川稠王
開院易王

右来ル二十六日親王宣下式被為行候ニ付夫々可取計此
旨相達候事　本局主査宮内省ヘ通牒

陸軍省ヘ達

明二十六日閑院易宮有栖川稠宮親王宣下ニ付為護衛近
衛騎兵一分隊宛可差出此旨相達候事　八月廿五日

但午前十時皇居ヘ参集式部寮ヘ可打合事

式部寮上申

明二十六日閑院易宮有栖川稠宮親王宣下ニ付護送ト
シテ近衛兵可差出旨別紙ノ通陸軍省ヘ御達相成度此

段上申候也 八月廿五日

上申ノ趣相達候事 八月廿五日

宮内省上申

閑院易宮有栖川稠宮明二十六日親王宣下ニ付護送兵差出ノ儀別紙ノ通式部頭坊城俊政ヨリ上申致候ニ付致進達候也 八月二十五日

書記官議案

式部頭上申有栖川稠宮閑院易宮親王宣下ノ節護衛兵差出ノ件

右式部頭上申ノ通陸軍省ヘ御達可相成哉仰裁候也 八月二十五日

宮内省屈

親王宣下ノ儀別紙ノ通及布達候條此段御屈申進候也



八月二十九日

同省布達

右特旨ヲ以テ仁孝天皇御養子親王ニ被復候事

孝明天皇御養子　易宮

右今般名ヲ載仁ト賜候事

二品熾仁親王弟　稠宮

右今般聖上御養子熾仁親王ノ継嗣ト被定名ヲ威仁ト賜候事

三品能久王 北白川宮

載仁王 閑院宮

威仁王 有栖川宮

右本日親王宣下三品ニ被敍候事

右布達候事 八月二十六日



元年閏四月十六日

親王諸王ノ區分ヲ定ム

親王　皇兄弟　皇子皆為親王

諸王　皇兄弟　皇子以外為諸王自親王五世雖得王名不在皇親ノ限

○復古記云按スルニ本條ハ大寶令ノ文ニ係ル蓋下條ノ宣達アルヲ以テ其綱領ヲ示セシナリ

伏見宮

有栖川宮

右嫡子者即今先是迄ノ通為御養子可有親王宣下旨被仰出候事 伏記

閑院宮

右嫡子相續ノ節先是迄ノ通為御養子可有親王
宣下旨被仰出候事

○復古記云按スルニ官中日記本件ノ草按ヲ載セ第一條ニ桂宮ノ宣旨アリ閑院宮ハ伏見宮ト同シ蓋桂宮ハ女王ナキヲ以テ之ヲ除キ閑院宮ハ當時主ナキヲ以テ之ヲ改メシナリ

賀陽宮
山階宮
聖護院宮
仁和寺宮
華頂宮

右親王 宣下後ニ候間是迄ノ通嫡子始メ賜姓可被列臣籍旨被仰出候事



昭高院宮

右為聖護院宮ノ子相續ノ旨被仰出候事
但嫡子始メ賜姓可被列臣籍事

梶井宮

右親王 宣下後ニ候間是迄ノ通嫡子始メ賜姓可被列臣籍旨被仰出候事
但可為賀陽宮以下ノ通且被止座号候事
制度局議按各局ハ照會

親王 皇兄弟皇子皆為親王
諸王 皇兄弟皇子以外為諸王自親王五世雖得王名
不在皇親ノ限

桂宮

右當宮後ハ可為伏見宮以下ノ通事

伏見宮　有栖川宮　閑院宮

右嫡子ハ即今先是迄ノ通為御養子可有可有親王宣下事

賀陽宮　山階宮　聖護院宮

仁和寺宮　華頂宮

右親王宣下後ニ候間是迄ノ通嫡子以後ハ賜姓可被列臣籍事

照高院宮

右為聖護院宮ノ子相續ノ事

但照高院宮嫡子以後ハ賜姓可被列臣籍事

梶井宮

右復飾被仰出可為賀陽宮以下ノ通且可被止座主ノ号事

右之通被仰出候ヲ御所意無之候哉承度存候也　元年三月七日　官



元年十月十九日

東宰中中務卿宮常陸宮尹宮四親王ニ參番セシム

辨事達

御東宰中議參ノ參番ノ處御用多ニ付中務卿宮常陸宮尹宮ノ御參番可有之旨被仰出候事　皇族

三年十一月

山階東伏見梨本三親王ニ二代目ヨリ姓ヲ賜ヒ華族ニ列ス

山階東伏見梨本三宮ヘ達

二代目ヨリ賜姓華族ニ被列候事 皇族 華頂宮北白川宮等ヘ達

有無如何

○ 五年三月廿四日 北白川宮ヘ達ス 二編制度種族ニ載ス

○ 三年三月十四日 北白川宮ノ嗣子ニ篤麿親王ヲ
故令
改称無
二代目ヨリ賜姓華族ニ列シ華族令第三条
山階東久邇家本三宮（華族）

山階東久邇家本三宮
三年十一月



三年十二月十日

四親王ノ外新ニ親王タルノ家ハ二代目ヨリ賜姓華族ニ列シ、四親王ハ伏見宮閑院宮桂宮有栖川宮ヲ指ス

今般御改正ニ付テハ四親王ノ外新ニ御取立相成候親王家ノ儀ハ二代目ヨリ賜姓華族ニ被列候事 誌

四年五月廿八日

一代宮隱居ノ終身祿ヲ定ム

一代宮

一隱居ノ上ハ終身貳百石被下太政官日記

二年六月十七日

公卿諸侯ノ稱ヲ廢シ改テ華族ト稱セシム

官武一途上下協同ノ思召ヲ以テ自今公卿諸侯ノ稱被廢改テ華族ト可稱旨被仰出候事

但官位ハ可為是迄ノ通候事

十月十九日　四年

吏官達

皇族華族取扱規則

一皇族在官ノモノハ職務関係ノ外ハ皇族ヲ以可取扱事

一華族ノ輩自今六等官相當取扱ノ事

一華族在官ノ輩職務関係ノ外ハ官族ノ内重ニ従ヒ可取扱事

右之通御決定相成候間為御心得申入候也

司法有司

司法中録　元士生縣知事　従五位島居忠文

司法少解部　元重原縣知事　従五位板倉勝達

右ノ通判任官拜命有之候得共御禮式ニ拘リ候儀

八総テ非役華族ノ振合ニ為心得候テ可然哉至
急御差図有之度旨数奉伺候也

禮式ニ拘リ候節タリ共総テ判任官ノ取扱タル心ヘキ
事 九月十四日今式部寮
取扱如此旨ノ有下札アリ

司法省ヘ回答 光官

華族判任官奉職ノ儀ニ付伺書追テ御評議ノ上御
下知可有之候ヘ共先之迄ハ総テ判任官ノ取扱ニテ
可然旨既及御答候也

追テ天長節其外節朔共参賀ニ不及候事 月日

式部寮議按

華族判任拝命ノ輩非役華族ノ振合云々司法省
ヨリ伺尚勘考仕候所在官ノ者ヲ非役ノ取扱ハ不躰裁
ノ儀殊ニ方今條理厳ノ御時節ニ付断然尤ノ如ク御決

定無之候テハ差支可申奉存候
皇族以下平民ニ至迄在官ノ向ハ族ニ不拘官相当ヲ
以テ都テ御取扱ノ事 十月二日

元院議按

華族判任拝命ノ輩ハ非役華族ノ振合云々右ハ職ニ
付テ御取扱ノ時ハ判任ナレハ判任ノ御取扱有之且
身分ニ付テノ儀ハ華族ノ御取扱至当ト奉存候非役
華族ノ御取扱ト申モノ則華族身分ニ付テノ御取扱
ニテ可有之候間以後ハ非役華族ト申名目被相廃唯
華族ト之稱シ候方可然尤モ位階ヲ廃シ爵ヲ賜ハ
リ候御規則相立候上ハ追等ノ細目自然論ヲ待タ
又儀ト奉存候事 十月

六年

桂宮静寛院宮化粧料等大蔵省ヨリ直ニ給スルヲ嚴ノ
宮内省ヨリ給ス

大蔵省届

宮内省常額米一万八千石ノ内桂宮静寛院宮化粧料
三百石ツヽ上臈以上給禄扶持米二百三十八石ワヽ
及ヒ静寛院宮場リ米千石トモ総計米二千七十六石
八当省ヨリ夫々直渡ニ取計候ニ付宮内省常額ノ内
右ノ米高引去相渡来候ハヽ共右ニテハヽ不都合ニ付以
来一万八千石ノ分総テ同省ヘ相渡右ノ内ヲ以夫々
渡方取計候方可然被存候依テ以来右様取計可申候
故段申上置候也三月九日大蔵

七月三十一日　六年

大蔵省へ達

今般官方家禄并賜米扶助米等ヲ廃シ更ニ賄料ヲ賜リ其他改正ノ儀別紙達書ノ通相心得官内省受領当七月ヨリ一ヶ年米二千七十六石相減賄料金六万四千圓差加可相渡旨相達候事

一品淑子内親王二品親子内親王ヘ達　各通

今般　皇族家事向改正被　仰出候ニ付従前ノ家禄給映米等総テ相廃シ又来賄料トシテ一ヶ年金六千八百圓宛被下候事七月三十一日宮内

但本年ハ當七月ヨリ賄料ニ替可賜事

二品熾仁親王ヘ達

今般　皇族家事向改正被　仰出候ニ付従前ノ家禄賜

米等総テ相廃シ以来賄料トシテ一ヶ年金六千六十円
宛被下且一品憲仁親王一ヶ年金千五百圓被下候事
七月三十一日

但本年八月ヨリ賄料ニ替可賜尤賞典米ハ別段
ノ事

二品良慶親王ヘ達

今般　皇族家事向改正被　仰出候ニ付従前ノ家禄賜
米等総テ相廃シ以来賄料トシテ一ヶ年金六千六十圓宛
被下且後堂景子明子一ヶ年金五百圓三品朝彦宮
一ヶ年金千五百圓宛被下候事　七月三十一日宮内
但本年ハ七月ヨリ賄料ニ替可賜事
開院宮ヘ達

今般　皇族家事向改正被　仰出候ニ付従前ノ家禄相



廃シ以来賄料トシテ一ヶ年金六千六十円宛被下候事
七月三十一日宮内

但本年八月七月ヨリ賄料ニ替可賜事

二品嘉彰親王ヘ達

今般　皇族家事向改正被　仰出候ニ付従前ノ家禄
相廃シ以来賄料トシテ一ヶ年金四千六百五十貳円宛被下
候事　七月三十一日宮内

但本年八月七月ヨリ賄料ニ替可賜尤賞典米ハ別段
ノ事

二品晃親王
三品韶久宮ヘ達各通
二品守脩親王
三品博経親王

今般　皇族家事向改正被　仰出候ニ付従前ノ家禄相
廃以来賄料トシテ一ヶ年金四千六百五十貳円宛被下

候事七月三十一日宮内

但本年八月七月ヨリ賄料ニ替下賜事

靈鑑寺宮
圓照寺宮一達各通

今般　皇族家事向改正被仰出候ニ付自今寺門ヲ
離レ伏見家ニ復籍ノ上従前ノ賜米相廃シ以来賄料
トシテ更ニ一ヶ年金五百円宛被下候事七月三十一日宮内

但本年八当七月ヨリ賄料ニ替可賜事

宮内省伺

先般　皇族方賄向総テ於当省引受取扱候様御達相
成候以来家事其他日用ノ事等追々及見聞候處実ニ
不斟酌ノ儉不勘右ハ全ク家禄寡少ノ所帯難渋ヨリ相
生候譯ニテ不得止事柄ニ有之候間特別ノ御詮議ヲ
以往前ノ家禄ヲ被廃度ニ別紙積書ノ通賄料別途御

渡方相成候様ハ、向後不斟酌無之様注意取扱可致
候歟段至急御沙汰ノ程相頼候也　七月日　關宮内

伺之趣聞届別紙ノ通相達候條是迄其省ヨリ渡来候
皇族家禄来相廃シ其省定額当七月ヨリ一個年来二
千七十六石相減金六万四千円相加候條右ノ以下賄
伺一切可取扱事七月三十一日

諸宮御費用見込

御直宮　内親王　桂宮　世襲
一ヶ年
一金六千八百圓
内譯
一ヶ月
金十五円　食料
同
金五十円　衣服料
同
金五十円　小遣

ノ千三百八十円　化粧料
金九百円　家扶二人
金十円宛
ノ金二百四十円　家従六人
金八円宛
ノ金五百七十六円　家丁四人
金六円宛
ノ金二百八十八円　下男五人
金三円宛
ノ金百八十円　輿丁六人
金三円宛
ノ金二百十六円　老女二人
金十円宛



ノ金二百四十円　上女中六人
金八円宛
ノ金五百七十六円　下女四人
金三円宛
ノ金百四十四円　料理方一人
金五円
ノ金六十円　宮達常用雑費音信贈答
金二千円　筆紙墨薪炭油燭類共
御直宮内親王静寛院宮一代
一金六千八百円
内譯同上
有栖川宮世襲
一金六千。六十円

御書生 内譯

金十五円　食料
金四十円　衣服料
金三十円　小遣
〃金千〇二十円

御簾中

金十五円　食料
金四十円　衣服料
金二十五円　小遣
〃金九百六十円

御子達二方

金十五円　食料
金二十円　衣服料

金十円　小遣
〃金千〇八十円
金十円　二方學費
〃金二百四十円　家扶一人
金十円　家従四人
〃金百弐十円　家丁二人
金八円　下男四人
〃金三百八十四円　馬二疋
金六円
〃金百四十四円
金三円
〃金百四十四円
金十円

一年 金二百四十円
一年 金三円五十銭 別当二人
一年 金八十四円 老女一人
一年 金八円
一年 金九十六円 上女中三人
一年 金六円 下女二人
一年 金二百十六円
一年 金三円 料理方一人
一年 金七十二円
一年 金五円 官繕費中和費書籍費
一年 金六十円 筆紙墨薪炭燭蝋油類
一年 金千二百円
伏見宮世襲

一年 金六千〇六十円
内譯同上
開院宮世襲
一年 金六千〇六十円
内譯同上
山階宮一代
一年 金四千六百五十二円
内譯
御手当
一月 金十五円 食料
一月 金三十円 衣服料
一月 金二十円 小遣
一年 金七百八十円

御簾中

金十五円　食料

金三十円　衣服料

金十五円　小遣

ノ金七百二十円

御子達二方

金十五円　食料

金十五円　衣服料

金七円五十銭　小遣

ノ金九百円

金十円　二方學費

ノ金二百四十円

金十円　家扶一人

ノ金百二十円　家従三人

金八円　下男三人

ノ金二百八十八円

金三円　馬二疋

ノ金百〇八円

金十円　別当二人

ノ金二百四十円

金三円五十銭　老女一人

ノ金八十四円

金八円

ノ金九十六円

金六円

ノ金百四十四円　上女中二人

一月 金三円宛

一ヶ年 ノ金七十二円

一月 金五円

下女二人

一ヶ年 ノ金六十円

料理方一人

一ヶ年 金八百円

宮殿官用雇費音信贈答
筆紙墨新炭油燭類

東伏見宮一代

一ヶ年 一金四千六百五十二円

内譯同上

北白川宮一代

一ヶ年 一金四千六百五十二円

内譯同上

梨本宮一代

一ヶ年 一金四千六百五十二円



内譯同上

華頂宮一代

一ヶ年 一金四千六百五十二円

内譯同上

有栖川一品宮

一ヶ年 一金千五百円

三品朝彦宮 元中川宮

一ヶ年 一金千五百円

伏見宮後室二人

一人一ヶ年 一金五百円宛

二人一ヶ年 ノ金千円

靈鑑寺宮

一ヶ年 一金五百円

圓照寺宮

一金五百円　一代限ノ分

通計金六万一〇四十円

但金三万五千〇六十円　是迄宮方家禄賜料賜米共

米七千九百〇七石二斗

内金二万三千七百二十一円六十銭　但米一石ニ付金三円直

差引

金三万六千三百十八円四十銭　改正ニ付増分

諸宮是迄之家禄賜料賜米等取調

桂宮

一米千十五石　家禄

一米三百石　化粧料

一米二百三十八石　上臈以下給禄

ノ千五百五十三石　賜料

静寛院宮

一米千石　賜料

一米三百石　化粧料

一米二百三十八石　上臈以下給禄

一千五百三十八石

有栖川宮

一米五百二十石五斗　家禄

一米三百石　一品慥仁親王賜米

一米七十石

一米三十石　利子賜米

ノ九百二十石五斗　稠宮賜米

伏見宮

一米五百五十九石二斗　家　祿
一米百石　景子賜米
一米五十石　明子賜米
一米三百石　三品朝彦宮御扶助米
ノ千〇〇九石二斗
閑院宮
一米五百三十石　家　祿
山階宮
一米四百三十一石三斗　家　祿
東伏見宮
一米四百三十一石三斗　家　祿
華頂宮
一米四百三十一石三斗　家　祿

梨本宮
一米四百三十一石三斗　家　祿
北白川宮
一米四百三十一石　家　祿
靈鑑寺宮
一米百石　家　祿
圓照寺宮
一米百石　家　祿
通計
米七千九百〇七石二斗　宮内
宮内省定額米金差引取調
一米二千〇七十六石
是ハ往宮化粧料并上臈以下給祿等寛院宮賄料
其外共定額米一万八千石ノ内ヨリ是迄渡居

一米四千九百八十一石二斗

是ハ宮方家禄定額

ノ米七千〇五十七石二斗　此度宮方賄向改正ニ付西納

（下札）米八百五十石ハ賜米ニテ宮方家禄定額外ニ付此度ニ除ク

一金六万〇〇四十四　前同断ニ付定額金増

右ニ付定額米金左之通改正

定額米一万八千石ノ内二千〇七十六石減ニ付

一米一万五千九百二十四石　改正定額米

定額金五十八万二千四ノ處六万〇〇四十四増ニ付

一金六十四万二千〇四十四　同定額金宮内

宮内有伺

一霊鑑寺宗諱圓照寺文秀両宮ノ儀ハ寺明御引離ノ

上伏見家ノ復籍被　仰付度候事

但復籍被　仰付候テハ終身被下金ノ儀ハ其度

伺ノ通被　仰付度候事

一内親王方家令ノ儀ハ八等官相当ニ御改正相成度

候事

一世襲宮并一代宮家令ノ儀ハ九等官相当ニ御改正

相成度候事

右相伺候至急御沙汰ノ程相願候也　七月日　宮内

宮家令等級改正ノ儀伺ノ通御許允公布相成ル職制ニ出ス

財務課議按　法制度務歴査

宮内有稟議　皇族方賄向改正従前家禄ヲ廃シ賄

料ニ更ヲ其他鑒正ノ件々及審議候處世襲并一代限リ

トモ従前石高ヲ以推候テハ経費不足ハ申立モ無之

所詮御体裁モ不相立ニテ同有見之ノ通御賄料金

額御定相成可然、靈鑑寺圓照寺両宮復稱ノ儀及
ヒ宮方家令等級等ノ件々モ稟議至当ニ付疑ノ廉モ有之間
敷御允裁相成可然、歟仍テ御指令按及ヒ諸宮方ヘ御
沙汰并大藏省ヘ御達按取調次第相伺候也　七月廿日　宮内

皇族料表賜

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 桂宮 | 千五百五十三石 | 六千二百十二円 | 五百八十八円 | 三千二百十二円 | 前家禄其他諸米合計 | 金ニ直シ一石ニ付四円ノ積 |
| 静寛院宮 | 千五百三十八石 | 六千百五十二円 | 六千八百円 | 六百四十八円 | 改正金高 | 差引増金高 |
| 有栖川宮 | 六百二十石五斗 | 二千四百八十二円 | 六千六十円 | 三千五百七十八円 | | |
| | 外三百石一島有栖川宮 | 千二百円 | 千五百円 | 三百円 | | |
| 伏見宮 | 五百五十九石二斗 | 二千二百廿六円余 | 六千六十円 | 三千八百廿三円廿銭 | | |
| | 外三百石三品朝彦宮 | 千二百円 | 千五百円 | 三百円 | | |
| | 内百五十石後室二人 | 六百円 | 千円 | 四百円 | | |
| 閑院宮 | 五百三十石 | 二千百二十円 | 六千六十円 | 三千九百四十円 | | |



| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 山階宮 | 四百三十一石三斗 | 千七百廿五円廿銭 | 四千六百五十二円 | 二千九百廿六円余 | |
| 東伏見宮 | 同 | 上同 | 上同 | 上同 | |
| 北白川宮 | 同 | 上同 | 上同 | 上同 | |
| 梨本宮 | 同 | 上同 | 上同 | 上同 | |
| 華頂宮 | 同 | 上同 | 上同 | 上同 | |
| 靈鑑寺宮 | 百 | 四百円 | 五百円 | 百円 | |
| 圓照寺宮 | 同 | 上同 | 上同 | 上同 | |
| 合計 | 七千九百七石二斗 | 三万千六百八円余 | 六万四十円 | 二万八千四百十円廿銭 | |

宮内省ニテハ一石三円ノ積ヲ以テ計算相立候ヘ共宮内省直税ニ付本文ノ通比較取調申候宮内

宮内省

五年

伏見邦家親王ニ宮中杖ヲ許ス

伏見邦家願

邦家近来足痛ニテ歩行不任意困却仕候ニ付自然参朝ノ節宮中杖御免ノ儀奉願上度旨御内達願入候也

四月八日　皇族

五年

願之通　月日欽

十二月五日　七年

山階宮外三宮皇室ノ支家タル旨ヲ令スル附服忌前規ニ
從フ

宮内省伺

孝明天皇御猶子
元勧修寺宮相續　二品親王山階晃

仁孝天皇御養子
元仁和寺宮相續　二品親王東伏見嘉彰

孝明天皇御養子
元智恩院宮相續　三品親王華頂博經

光格天皇御猶子
元梶井宮相續　二品親王梨本守脩

右各宮儀伏見家ノ庶子ヲ以テ歴朝ノ御養子若クハ
御猶子被蒙仰夫々親王　宣下相成各法親王家相續
ノ處元治以降夫々復飾被仰付別段家禄被成下各自
一個ノ宮家ニ被建候ニ付テハ　皇室ノ支家ニテ伏
見家ノ支家ニハ無之哉何分系統上服忌等ニ相関候

儀ニ付一應相伺候至急御指令有之度候也　十一月廿四日

伺ノ趣ハ山階宮ト外三宮トモ皇室ノ支家ニテ伏見家ノ支家ニハ無之候事　十二月五日

但服忌ノ儀ハ従前宝式ノ通可被受候事

式部卿議按（光院時御用取調歴査）

伏見故一品邦家親王息女正三位徳川茂承室則子死去ニ付山階宮始叔姪兄弟ノ續ヲ以テ被受候忌服ノ儀取調候處服忌ハ先舊武家ノ制ヲ被用候儀ニ付右ニ據リ候ハ東伏見宮幸項宮ハ仁孝孝明両帝ノ御養子ニ付実方兄弟半減ノ忌服被受当然ノ儀ニ可有之山階梨本宮ハ光格孝明両帝ノ御猶子ニ有之故ニ宮ハ伏見家ニ対シ養実ノ名義因ヨリ有之間敷且又伏見二品宮ハ孝明帝御養子ニテ伏見家相續ニ有之就テハ是亦養実ノ名義差別如何相立可然哉情理両義何レモ偏重難致ニ付テハ名義難相定右等ノ儀ハ篤ト御評議ノ上御規則更ニ確定有之度先夫マデハ舊例ニ據リ定式ノ忌服被受候方可然乎ニ存候尤山階宮始メ各宮儀ハ伏見家ノ支家ニ無之哉ノ儀ハ御系圖ニ関係候事故古様リ〳〵御下問有之度存候故段上申候也　十一月廿八日

尤院議按（時御用取調歴査）

宮内卿伺山階宮外三宮系統ノ儀審按仕候處右各宮ハ元ト伏見家ノ庶子トイヘトモ已ニ歴朝ノ御養子若シクハ御猶子ヲ以テ親王宣下相成候末各皇族ニ列セラレ候是レ則親王家ヨリ而シテ親王家ノ本宗ハ則皇室ニテ別ニ本支不可有之儀ト奉存候且

若シ親王家ノ支家ナラハ必ス諸王以下ナル一ツ今殊
更ニ至尊ノ御養子又ハ御猶子ト被為成親王宣下
相成候上ハ全ク皇室御直派ト可被為成御趣意タ
ルヤ瞭然ト存候式部寮議按服忌ノ儀ハ先達テ京家ノ式
ヲ廃セラレ專ラ武家ノ制ヲ可用旨御布達相成候
ヨリ右様疑念ヲ生シ候儀ニ御坐候然ハ處元来諸親
王ノ至尊御猶子御養子等ト被為成候儀ハ臣民一般ノ養子
猶子等ト八自ラ區別アリテ相混スヘカラス故
ニ親王家ニ於テハ從前ノ通リ定式ノ服忌被請可然
ト存候依テ御指令按取調上申仕候也　十一月日欠



正月十日　五年

伏見易宮ヘ達

閑院宮相續被仰付候事

閑院宮ヘ達

伏見易宮其宮相續被仰付候事　正月十日　皇族

閑院宮ヘ達

實家ヘ復歸ノ後当分現米百石下賜候處今般閑院宮相
續被仰付候ニ付自今不被下候事　正月

伏見宮ヘ達

閑院易宮ヘ別紙ノ通御沙汰相成候ニ付為心得相達
候事　正月

京都府上申

伏見宮未男易宮閑院宮ヘ相續ノ儀ニ付右両宮ヨリ

宮内省

別紙ノ通申出ニ付致御聞候宜御取計可被下候也

十二月十七日

伏見宮邦家願

末男易宮当七歳閑院宮相續任所望差遣ニ度依相伺候宜御沙汰願入候也

被聽食届候事

閑院宮家令願　京都府先

別紙願書ノ通当宮相續ノ儀被奉願候間取計ノ程奉願候以上四年

別紙

当宮吉子追々被及先年ヲ今相續ヲ無御座深恐入候ニ付伏見一品宮末男易宮所望仕何卒当宮相續ノ儀被仰出候樣取計ノ程奉願候以上　十二月十七日



京都府ヘ達　史官

伏見易宮閑院宮相續ノ儀別紙ノ通御沙汰相成候間御回シ申入候ヘ共御取計可有之候也　正月十二日



宮内省

四月廿二日　七年

山階宮男菊麿ヲ梨本宮養子トナス

宮内省上申

山階宮当三月出生ノ男子菊麿梨本宮ヘ養子ノ儀ニ付両宮家令ヨリ別紙ノ通リ願出候間如何取計ハ可申候也　四月十七日　宮内

別紙願ノ趣被聞食候旨可相達事　四月廿二日

山階宮家令山本速夫ヨリ宮内省宛

当宮御男子菊麿殿儀今般梨本宮ヨリ御所望ニ付為御養子被差遣度如何取計被相願候也　四月七日　宮内

梨本宮家令正七位武田敬孝願

山階宮御男菊麿殿儀今般当宮ヘ御養子ニ被申請度如何取計相願候以上　四月十五日　宮内

宮内省ヘ照管

別紙山階宮御男梨本宮ヘ御養子ノ儀奏聞ヲ遂ケ
朱書ノ趣可被相達旨申入候也　四月廿二日

外史議按

別紙宮内卿上申梨本宮御養子ノ儀山階宮熟談
ノ上御願ノ儀ニ付双方共左ノ通御指令相成可然哉
旨伺候也　四月十九日ニ奏聞ノ儀ハ別紙
ヲ以宮内卿ヘ可相達ト存候





三月四日　五年

二品親王伏見宮家禄
東伏見宮家事取扱　兵部大丞船越衛宛
二品親王嘉彰
從四位有馬頼咸娘頼子
當主
妻
家禄現米四百三十一石三斗
御賞典米千五百石
右ノ通ニ御座候以上



宮内省

二月廿三日　八年

東伏見宮御室宮ト改稱ヲ兄サス

宮内省伺

東伏見宮称号御室宮ト被相改度旨別紙ノ通被願
出候ニ付一應取調候處差支ノ筋無之樣存候間願
ノ通被聞召度此段伺候也　一月廿日　宮内

東伏見二品親王願

嘉彰称号ノ儀ハ去ル明治三年現今ノ通リ改称願之
候節御室宮ト相改度存慮ノ處其砌ハ仁和寺ト唱ヘ
別ニ付判然セサル云々ノ廉有之候間不取敢実家ノ
称号ニ基キ其頃東西別住ニ付東ノ一字ヲ加ヘ置候
一応唯実家ト中近ニテ称号ニ取リテハ別段由緒モ

無之殊ニ現今ノ如ク兩家トモ当地住居ニ相成候テ
ヨリ混乱スル一半ハ無之候ヘハ元来角称一誤ル者住
々有之不都合ノ儀ハ少カラス且山階宮ハ元ノ住所ニ
出リ華頂宮ハ元ノ山号ニ出ル等諸宮ノ称号統テ復
飾前相續イタシ候儀自カラ減セサル姿ニ付表彰
ニモ兼テ素志ノ通リ今般更ニ御室宮ト改称相
願度旨願奉伺候也 一月十九日 宮内

朱照 度務課議按
宮内省伺東伏見宮御事御室宮ト改称ノ儀ハ御
許可無之方可然哉御指令按取調仰聞候也
一月廿四日 宮内

# 皇族御人員調

内親王

桂　一品　淑子　准三后　四十一

親王

光格天皇御猶子

有栖川　一品　職仁　中務卿　五十七

同

伏見

仁孝天皇御猶子

邦家　式部卿　六十七

有栖川

光格天皇御養子實伏見故貞敬親王男

職仁　大宰帥　三十四

聖護院　二品　嘉言　修驗道管領　園城寺管領　四十八

仁孝天皇御養子實伏見邦家親王男

仁和寺　嘉彰（ヨシアキ）　兵部卿　二十三

同實伏見故貞敬親王男

賀陽　三品　朝彦（アサヒコ）　彈正尹　四十五

光格天皇御養子實伏見故貞敬親王男

梶井　守脩（モリナガ）　五十

孝明天皇御養子實伏見邦家親王男

華頂　博經（ヒロツネ）　十八

同御猶子實伏見故貞敬親王男

山階　晃（アキラ）　席陸大守　五十三

孝明天皇御養子實伏見邦家親王男

聖護院　知成（トモナリ）　十三



伏見　敦宮（アツノミヤ）　十一

閑院

曼殊院

宮内省

仁孝天皇御養子實伏見邦家親王男

輪王寺　一品　公現（コウゲン）　二十三

昆沙門堂　輪王寺宮兼帯

勸修寺　無住

大覺寺　同

圓滿院　同

妙法院　同

青蓮院　同



光格天皇御養女實伏見故貞敬親王女

靈鑑寺　無位　宗諄（ソウジュン）　五十三

孝明天皇御養女實伏見故貞敬親王女

圓照寺　文秀（ブンシウ）　二十七

大聖寺　無住

曇華院　同

光照院　同

林丘寺　同

寶鏡寺　同

中宮寺　同

九條故輔嗣卿猶子實伏見故貞敬親王女

瑞龍寺　日尊　六十二

九條入道尚忠公猶子實伏見邦家親王女

瑞法光院　日榮　十四

近衛忠熙公女

法華寺　高鳳　十七

三時知恩寺　無住